寄稿編

「NPO法人吹田フットボールネットワーク」

の挑戦

四國 光 (NPO法人吹田フットボールネットワーク設立代表者)

P

「NPO 法人吹田フットボールネットワーク」 とは。

「NPO 法人吹田 フットボールネットワーク」 (2005年4月設立) とは、大阪北摂を主なエリア として活動する NPO 法人であり、その活動は次の 三点を中心としている。第一にジュニアユース世代 (U-15中学生世代) のクラブチーム『千里丘(せんりおか) FC』の運営。第二に幼児・小学生世代のサッカースクール『千里丘アカデミー』の運営。そしてそれらの活動を通じた指導者の育成。この三点を通じてスポーツによる地域の活性化に貢献する事を主なミッションとしている。

スクールの『千里丘アカデミー』については、他のクラブとの選手登録の競合をさけるために、あくまでスクールに留まりチームの形はとっていない。よってチームとしての選手登録はなく、小学生以下の子どもたちに対して『千里丘 FC』のコーチたちが、日々の活動から得られた経験とノウハウを活かし若年層にもそれらを適応する、という趣旨で育成にあたっている。全ての子どもたちは、別のチームに所属しながら、いわば塾のように『千里丘アカデミー』に通っている。この『千里丘アカデミー』から毎年何人かは『千里丘 FC』に入団となるため、『千里丘アカデミー』を経て『千里丘 FC』に入団となるため、『千里丘アカデミー』を経て『千里丘 FC』に入団する子ども達へは、最長9年の継続指導が可能となる。

加えて重要な事業は指導者の育成。若い指導者が、 練習や試合において選手の指導体験を実地で積み重ね て行くことを通じて、指導者の育成を並行して行っ ていく。当然ながら、良い指導者なくして育成なし。 この三つの点がこの NPO の主な活動領域となってい る。

中学世代とは言うまでもなく人生の通過点。次の高校世代でどのようにサッカーを楽しむか。プレーを続

け更に上を目指すのか。あるいはプロを目指すのか。あるいはプレーではなく別の仕方でスポーツを楽しむことを選択するのか。スポーツと関わる事で人生は必ず豊かになる。一部の子どもたちは、クラブでの体験を糧としながら、成人した後、またクラブに戻って来て今度は指導する側となり子ども達を育成する。このNPOが、広くスポーツ生活のハブのような機能を果たし、「スポーツを楽しむ」ことの大きな社会的循環が出来ればいいと願っている。

NPO 設立から約14年。クラブチームである『千里丘 FC』は、前身の時代も含め中学世代の全国大会(『日本クラブユース選手権大会』と『高円宮杯全日本ユースサッカー選手権大会』)に、関西代表としてこれまで10回出場して来た。そのうち3回は、「街クラブ」としては全国最高位となる全国ベスト8の結果を残している。また昨年の全国大会においては大会得点王が『千里丘 FC』から生まれるという栄誉にも恵まれた。

チームは強いチームにもまれる事で切磋琢磨しレベルが向上する。関西地域は4つ(ガンバ大阪、セレッソ大阪、ヴィッセル神戸、京都サンガ)のJクラブ下部組織が活動するいわば激戦地域であり、その意味で非常に良い競争環境に恵まれていると言える。これまでに我々のNPOからJリーガーも輩出し、あるいはいきなり欧州でプロになる選手も生まれるなど、手前味噌ではあるが、選手人員が限定される「街クラブ」としては、極めて良好な運営が維持され、着実に成果が生まれていると自負している。

しかし、NPOの目的はクラブとしての戦績を残す事だけではなく、あくまで選手と指導者の育成を地域とのネットワークで実現していくこと。そしてその事を地域の活性化に結び付けて行くこと。現在のこの状態に満足せず、更に地域と連携しながら、今後も活動を推進していきたい。

「NPO 法人吹田フットボールネットワーク」 設立の背景

そもそも、なぜ、この NPO が発足したのか。その 点からまずご説明したい。

NPOの立ち上げを検討し始めた約15年前当時は、公立の学校にとって、少子化、教師の作業激務化、等で学内の部活の成立が危ぶまれる、という事態が頻発していた。『千里丘FC』が今でも密な連携を取らせて頂いている吹田市立千里丘中学校のサッカー部も、全国大会準優勝という輝かしい結果を残したにも拘わらず、部員不足で廃部の危機に追い込まれた。そこで、部活を発展的に解消し、中学生世代の街のクラブチーム『吹田JFC千里丘』として再出発を図り、後に『千里丘FC』と名称変更した。

クラブチームとして、吹田市立千里丘中学校の校庭を学校の活動時間外に練習場として活用させて頂くという、学校との連携で成立した街のクラブチーム。学校の活動時間外となると、特に冬場は暗くなる。しかしこの学校にはグラウンドに照明施設があり、そのために比較的遅い時間の練習も可能にしていた。

しかし、更にまたクラブの指導者(学校の教員)の 転勤の問題が発生し、またもやクラブ解体の危機に立 たされることになった。育成は指導者ありき。組織の 継続的な活動を保証するためにどうするか。

そこで我々が行きついた結論が、運営母体として NPO 法人を設立し、その組織が地域のスポーツ活動 の核となって子どもたちのスポーツ活動を支え持続的 な活動を展開していく、という方針であった。

最初は NPO とは何か、という手探りの状態からから始まり、約10ヶ月かかり、2005年4月に「NPO 法人吹田フットボールネットワーク」が成立した。現在私は既に定年退職した身だが、当時はかなり多忙な会社員生活を送っており、土日になると、朝から晩まで資料と格闘する日々が延々続いた。詳しい方にヒアリングするなど、NPO 設立のための資料作りに文字通り没頭し、会社の仕事では減らなかった体重が減るほどに力を注いだ。多くの方に協力を仰ぎ、会社の社長にあたる NPO の理事長には、もともと息子さんが千里丘中学でサッカーをされていたご縁もあり、仕事柄組織経営にも造詣の深い本田昌敏さんに依頼し就任頂いた。

関西には前述のように名だたるJクラブがあり、当

然ながらJクラブは組織、資金力、施設、全てが豊富だ。それに比べて、我々のような「街クラブ」は「金なし、場所なし、施設なし」のないない尽くし。あるのは人材のみ。それと地域の施設。ならば、NPOが核となり、地域の人材と、既存の施設を結び付ける役割を果たそうじゃないか。その事により、子どもたちのスポーツ育成を行い、地域の施設も有効利用させてもらい、地域全体を活性化していく、そのための NPO となろうじゃないか、という基本方針が決定し、地域との「ネットワーク」によって活動を活性化する、という意味合を強調する意味で NPO の名前を「吹田フットボールネットワーク」とした。

セルジオ越後さんからの助言

NPOを設立し、実際に運営を始めるにあたって、 私個人が最も頼りにしたのが、昔から何かと知恵袋に なって頂いていたセルジオ越後さんからの助言だっ た。セルジオ越後さんといえば、当然のようにサッカーのイメージが大変に強いが、実は現在もプロアイ スホッケーチームの「栃木日光アイスバックス」の実 質的なシニアディレクターをされていることからもわかるように、サッカーだけではなく、「スポーツ」全 般の振興に、長年大変献身されてきた方だ。「サッカーだけじゃだめなんだよ」がセルジオさんの口癖。組織 作りから選手の育成、子どもの教育、親としての在り 方、指導者としての在り方・・長年のスポーツ振興活動からセルジオさんが得られた体験は、まさに生の体 験により練り上げられた現場の「知恵」だ。

NPO設立にあたって相談に伺った私に対して、セルジオさんは即座に3つのアドバイスを言われた。即座に言われた、という事は、これまで多くの同様な組織作りに対して相談に応じられていたのだろうと思う。大変貴重で後から振り返ってみると実に的を射たアドバイスだったと思うので、ご本人の了解を得た上で、ここで敢えてセルジオさんの口調のままご披露したい。

アドバイスその1「四國さん、まず組織作りで一番 大事な事は仲間を作る事。NPOを立ち上げる仕事を 四國さんが一人で抱え込んでやっていたら、みんな、 『あれは四國さんの仕事だから・・』と、何となくみ んな引いてしまって、結局気が付いてみると四國さん が全部の仕事を抱えてしまう事になるよ。大事なのは チーム作業。サッカーと一緒だよ。ひとりじゃ試合で きないよ。一人で抱えるんじゃなくて、仲間を作って「巻き込む」こと。大人の仲間を作って、その人たちに、仕事を「分担」してもらう事。任せる事。これが大事。分担してもらう事で、更に仲間になってもらう。そうすると、効率良く仕事が回っていくようになる。一人で抱えていたら、結局その人の能力以上のものは絶対できないからね。仕事の質をあげようと思ったら、仲間を作って任せる事。大事な事よ。」

アドバイスその2「組織が出来たら、次は大人の仲 間とのコミュニケーションを大事にすること。この NPO は子どものサッカーの育成だからって、子ども の事ばかり考えていたらだめ。子どもは、良い指導を したら集まって来る。組織の運営は、大人がやる事。 ここが肝心。組織と言うものは創る事より、続けるこ との方が難しい。大体組織が上手く行かなくなったり、 組織が崩れるのは、外からじゃなくて、中から崩れる。 中の大人たちの意思疎通がうまく行かなくなって崩れ る。実際に崩れた組織は大体そう。特に NPO はみん な、自分達は「いい事をしてる」って思いで集まって いるから、意見が合わないと、すぐに感情的に対立し てしまう事が多い。そのためには、大人同士が会話す ること。一寸集まってお茶を飲むんだっていい。宴会 だっていい。食事会だっていい。とにかく、頻繁に集 まって顔見ながら会話して、考え方や活動をすり合わ せすること。目標をみんなで共有して、大人が一つに なって目標に向かって動く。これが大事。」

アドバイスその3「組織が上手く回るようになったら、今度は、自分達の組織の事だけじゃなくて、他の組織と手をつなぐことを考える。点から面にしていく。 束ねる。 そのためにも、自分たちの活動がちゃんとしてなきゃだめだけどね。 他の組織と連携して何かができるようになると、活動が大きくなる。 だけど、これはまだ先の話だけどね!

現在、我々は常に手探りの状態にある。NPO 設立時にセルジオ越後さんに頂いたアドバイスの1と2については、かなりのレベルで実施できているのではないかと自負している。3については、今後の課題。更なる発展を図りたい。

これから目指す事

組織は生き物だ。ヴィジョンありき。「一緒にあの山に登ろう」という目標設定があって初めて組織員の心がひとつになる。ヴィジョンがあれば高い目標達成が可能となりヴィジョンがなければ惰性に流れる。

熱い情熱で高質な指導を続けてこられた吉澤秀樹監督、そして組織を潤滑に運営して来られた本田昌敏会長の元、あくまで目標は高く持ちたい。一つはこのNPOの活動を通じて、子ども達の人間的成長を支え、その先に日本代表選手、更には世界で活躍する選手を輩出したい、という目標。もう一つは、NPOがハブとなり、プレーするにせよ、鑑賞するにせよ、スポーツを楽しむことを核とした大きな社会的な輪を作っていく、という目標。それらの活動を通じて街のスポーツNPOとして先進的な事例となる事。

まだまだ道のりは長い。だが、我々自身が、その過程を存分に楽しみながら、ヴィジョンの実現に向かって活動ができればいいと思っている。

部活動を自主的自発的と謳う行政の限界

中屋 晋 (紐日本部活指導研究協会 代表理事)



はじめに

8月17日の「NPO 法人サロン 2002 公開シンポジウム 2018」〜部活動を語ろう!〜に参加させて頂きました。

この会への参加を決めた理由は2つです。1つは、 会のテーマが「部活動を語ろう」だったこと、もう1 つは、中塚義実氏に会うためです。

中塚氏と初めてお会いしたのは、私が理事を務める 日本部活動学会の大会後の情報交換会の席でした。そ して、初めて会話をしたのが、3次会で入った巣鴨の 居酒屋です。

北海道から参加された若い20代の先生を間に3人で終電まで、部活動について語り合いました。

女性の方だったのですが、遥々北海道から上京した 彼女は部活動指導と教科指導の両立に本気で悩んでい ました。ある意味悩みは人を動かすエネルギーにもな るのかも知れません。

そんな彼女の悩みに中塚氏と私は真剣に答え、解決策を語り続けたのでした。初対面ではありましたが、 その時、中塚氏の柔軟で暖かい人となりに触れたわけです。

その後、若い教員を三田線のホームで見送り、帰りしなに電車の中でいろいろな会話をするなかで、長年取り組まれておられるサロン 2002 の活動の話しをお聞きしました。私が感じたのは、何と言うか、世間の裏をかきながらも、独自の発想で人としての王道を探る手法の存在でした。

スポーツを「「生きる」だけならなくてもよいが、「よりよく生きる」には欠かせない文化」と位置付け表現しておられる中塚氏との出会いがきっかけで、幸いなことに今回、本誌への寄稿の機会を得ました。ここで私の部活動制度への取り組みの歩みをここで紹介させて下さい。

見えてきた日本のスポーツ指導の体制

2003年3月、私は18年勤めた都立高校の教員を 退職し、単身でオーストラリアに渡りました。シドニー 郊外にあるマッコリー大学内のテニスアカデミーでテ ニスコーチをするためにです。そして3年間のコーチ 経験を経て帰国、日本でテニスコーチ業を開始し、そ のなかで外部指導員としていくつかの学校の部活動の 指導に携わってきました。

私の部活問題への取り組みの背景はこんなところです。つまり、教員時代の経験、海外での経験、帰国後のコーチの経験。特に帰国後、プロ選手、トップジュニアの指導に関わる機会に恵まれ、そのなかで日本のスポーツ指導者の育成体制に疑問を抱くようになりました。

日本のトップアスリートの典型的な経歴は、まず中学生までに全国レベルの大会で好成績を残し、その上で強豪校に入学し、暴言と体罰が日常茶飯事のなか長時間の単調な練習と「強い選手」とされる相手とのゲーム練習に明け暮れる毎日、そして卒業後はプロになる者、推薦で大学に行く者に分かれる。こういった流れが多いようです。

中学までに大会で成績を残せない選手は、高校進学後、運が良ければ良い指導者に巡り会えるが、ほんとんどの場合は専門外の指導者と良くも悪くもそれなりに部活動に打ち込むことになります。

全ての子供がトップアスリートになるわけではない と思いますが、好きなスポーツについて「知ること」で、 向上する機会は、可能な限り与えてあげたいと思いま す。

日本のスポーツ界には、技術とはもともと持っている才能そのもので変えようがないという考えが根強くあります。ですから、日本で多く見掛けるのは、理屈はいらない、とにかくひたすら長時間練習をする、あるいは気持ちの駆け引きで優位に立つトレーニング、

いわゆる根性を植え付けるトレーニングを繰り返す練 習です。

技術のための練習は、ただ単に競技の経験があって、 ゲームの相手が出来るだけではなく、ある程度指導者 としてのトレーニングと知見が必要なのです。

日本ではプロスポーツの世界でも、選手を引退した 翌日から指導者として指導に当たっているパターンがよ くあります。選手としての完成度と指導者としての完成 度を同じ尺度で認識しているのか、はたまた、スポーツ の指導者として期待されているものが少ないのか、、、

日本のスポーツ界は部活動が支えている が、、、

ここである疑問に突き当たります。日本のスポーツ 指導者のトレーニングシステムってどうなっているの だろう。この辺を考えていくと、その先にはどうしても、 学校の運動部活動の存在感が目についてくるわけです。

この部活動の問題をクリアすれば、意に反して長時間拘束され、気持ちで練習をすれば強くなるなどと言われて、何の技術的アドバイスも受けないで悩んでいる選手を一人でも多く救えるのではないか、、

この問題に関わって実態を調べてみると、日本のスポーツ界の未成熟な部分を目の当たりにすることになります。例えば、各競技の各指導者がバラバラに取り組んでいる状況があり、それによって科学的な指導が浸透していないため、暴言、体罰、パワハラが指導手段として市民権を得ている実態も現にあります。

そもそも日本の場合、部活動指導者を含めて、スポーツの指導者育成システムが国レベルで機能しておらず、一部の競技を除いて、無資格の指導者が自分の経験値で指導をしています。全国各地で成果を上げている指導者もいますが、それぞれ職人技で各々勝手にやっている状態です。

話題の日大アメフト部の危険タックルの問題も、運動部のガバナンス体制を疎かにしてきた結果でしょう。 残念ながら、これが日本のスポーツ界の実態です。

結局、その先にある世界を見ないで日本一だけを目指して、指導者の自己満足の道具として競技をさせられることはあってはならないのです。体罰やパワハラで優秀な奴隷を作るシステムは、短期的には効果があるかも知れませんが、スポーツをする意味の根本を否定することになります。

部活動制度の2つの問題点

昨今、各メディアに「ブラック部活」という見出し の記事を多く見掛けようになりました。

部員である生徒が生活のほとんどの時間を部活動に取られ、休むに休めない状況になり、心身ともに疲れ切っているという状況を「ブラック企業」になぞらえて「ブラック部活」と称しているようです。

また、部活に関わる教員側からも問題提起をされて おり、その場合も過酷な労働実態を捉えて「ブラック 部活」と称されています。

確かに、現状で生徒側からも教員側からも部活で疲れ切って負のスパイラルに陥っている悲鳴が方々から聞こえてきます。

この現状への流れのモトはいったい何なのか。私の 考える問題点は2つ。

1つは、部活動の基本的な名目が、自主的自発的とされているところにあります。

自主的自発的な活動自体についての良し悪しはともかく、この名目のもとでの活動となるとどうしてもプログラム自体の管理責任の所在が曖昧になってしまいます。まあ、平たく言えば、勝手にやってるんだからあずかり知るところではないといった感じです。

しかし、一方では安全面の責任は直接の監督者に明確にのしかかってくるわけで、つまり、部活動というプログラムの管理責任については、自主的にやれというおかしな命令のもと、現場の監督者に相当な責任が一方的に負わされるというシステムになっているのです。

2つ目は、職務なのか職務じゃないのかという曖昧ななかで維持されている教育活動なので、ほぼ労務管理のないまま一部の教員に負担が過剰に偏ってしまっているという点です。

本来の業務である教科指導の片手間でやらざるを得ない現状ですが、責任はしっかりついてくるし、研修制度についても重要な役割を担った教育活動の割りに現状に合った内容を本腰を入れて考えられたものが見当たりません。

教員にとっては、時間もない、研修の機会もないといった状況で、この結果、部活の指導スキルの低下を招き、生徒の安全が脅かされる現状になってしまっている、この辺の側面は確かにあるはずです。「ブラック部活」と言って当局や教員を批判するだけでは、根本的に問題の解決にはなりません。ここはしっかり抑えておきたいところです。

部活動は地域の自治活動と多くの共通点が ある

部活動の制度改革でネックになるのは、人材確保と 予算確保です。

- 1)人材確保は、教員の労働条件の問題と指導者の派遣システムの問題を考えなければならない。
- 2) 予算確保は、公的な財源には限界があるというところが壁になる。

この2つの問題を解決するために、どうすれば持続 可能な部活動制度に辿り着くのか。

例えば町会や青年会などの自治活動は、会費制の自主的自発的な活動で、多くは無報酬で行われおり、自治活動の一つの地域祭りの運営などは行政からの命令で行われてはいません。部活動も同様に行政から命令されて携わる性質の仕事ではないのではないか。

ここは地域祭りの運営と同じ発想で、行政とは別組織で運営をすることが制度的には適切なかたちに落ち着くのではないか、この様な提案をここまで折りに触れて発信してきました。

この発想をもとに先にあげた1)と2)の問題の効果的な解決策に繋げることが出来るのではないかと思っています。

人材については、学校内の指導する教員が、"やりたい人がやれて、やりたくない人はやらないで済む"そんな体制が実現すればよいと思っています。

そうなると、"やりたくない人"が今まで担ってきた部分を誰かが補わなければならないわけで、そこは当然外部からの指導者にやってもらうことになるでしょう。そこでまさに人材の確保の問題が浮かび上がってきます。この人材確保の問題は、制度と仕組みを整備すればクリアできるはずです。

部活動制度の改革モデル案として

部活動改革の話しになると規模縮小の結論を導き出している研究者は少なくないですが、改革ためのアイデアをもっと絞り出すことはできないでしょうか。

さて、協会が考える財源と人材を確保するための制度と仕組みとはどのようなものか。

次の3項目を改善策として検討してみてはどうでしょう。

1) 現職教員も外部からの指導者も部活動指導員として登録をする

部活動指導員という身分の指導員の配置が昨年、文 科省から発表されたが、現職の教員についても、この 部活動指導員という身分を部活指導をしたい職員に取 得してもらい、部活動を指導する指導者は、全員が部 活動指導員というかたちにする。つまり、部活動指導 員は、現職教員と外部の指導者からの構成にする。

2) 部活動指導員の資格認定と派遣を業務にする新たな全国組織を設立する

部活動指導員の資格認定と派遣は外部組織が担い、 自治体とは別の立場で部活指導者を管理する全国的組織にする。これによって、学校は部活動制度に協力するという立場をとることが可能になり、部活動の指導が教員の労務管理の問題から切り離され、行政の悩みが1つ解決するはずである。

3) 外部組織が活動資金を徴収し管理する

財源を必要とする指導手当の問題は、外部組織が高体連中体連と同様に各校から年会費を徴収するかたちにする。それに加え国や自治体からの補助金、民間スポンサーからの助成金を得ることも想定出来る。

また、国民意識のなかにこれほど大きな存在感を持つ部活動の経済効果も利用できるはずである。例えば全国組織という利点から全国大会などの放映権を各メディアとの交渉で資金源に変えるという可能性もあるし、その他関連グッズの販売などのアイデアを加えれば、日本における部活動の存在感を財源に変える工夫は出来るはず。

更に、指導者育成についてもこの部活指導委員を管理する外部組織が開催することで、指導者の質を担保する役割を果たせます。中体連も高体連も大会運営で手が回らないのが実情のようです。現状の指導者育成体制は片手間に行うような事業でしかないことを行政も認識すべきだろう思います。

そもそも行政が自主的自発的な活動を謳う部活動を 直接管理するということ自体、無理があるのはないで しょうか。その観点からすると別団体が外部から管理 して運営する方向に結論が落ち着けば、規模縮小とい う結論にはならずにほば現状を維持し続ける体制にな ると考えています。

肥大化した部活動を統括するこの全国組織の構想は、かなりのドラスティックな改革ではありますが、根本の仕組み自体を変える改革を考えるなら一案として検討の価値はあるはずです。

DUOリーグ 一サッカーを支える人材の育成

岸 卓巨 (NPO法人サロン2002事務局長、DUOリーグ事務局長、日本アンチ・ドーピング機構)



一般的に「部活動」について語られる時、その話題 の中で登場する生徒は、「選手」あるいは「プレーヤー」 であり、生徒がいかにスポーツを「プレーする」か、 教員や指導者が生徒にいかにスポーツを「プレーさせ る]かが話されることが多いのではないだろうか。「す る・見る・支える | などスポーツには多様な関わりが あることを理解している人は多いと思うが、特に中学 校・高校の部活動において、スポーツへの関わり方は 往々にして「プレーする」に限定して捉えられている のではないだろうか。おそらく、この事に違和感を 覚える人は多くはないが、スポーツを「プレーする」 ことに苦手意識を持っていた高校1年生当時の私は、 スポーツへの関わり方が「プレーする」に限定して捉 えられる現実に違和感と居心地の悪さを感じていた。 そして、「部活動をやめよう」とさえ考えた。しかし、 10年以上に渡ってサロン 2002 の事務局を務め、本 業でもスポーツに関わり続けている背景には、高校時 代の私に単に「プレーする」だけではないスポーツへ の関わり方・機会を提供してくれた DUO リーグの存 在が大きい。

DUO リーグとは

DUO リーグについては、シンポジウムの中で中塚 義実氏より語られているため、詳しくはそちらを参照 いただきたいが、東京都文京区・豊島区・足立区・中 央区の高校運動部を中心としたサッカーリーグで、全 国に広がるユースサッカーリーグのモデルとなった リーグである。1990 年代にサロン 2002 理事長の 中塚氏が原案を作成し、サロン 2002 の月例会でも 複数回に渡ってその理念や実施方法などが議論され、1996 年に開始された。当初は、10 チーム 1 リーグ 制でスタートしたが、その後チーム数が増え、1 リーグ制は昇降格ありの複数リーグ制に変わり、DUO リーグをモデルに作られた[JFAプリンスリーグ関東]

や「Tリーグ」、「地区トップリーグ」など DUO リーグを含む都内 8 つの「地区リーグ」から上位リーグにもピラミッド構造で繋がるようになった。出場チームも、高校運動部やクラブユースだけではなく、多世代型のクラブチームや大学のサッカー部、中学生の選抜チーム、複数校による合同チームなどに広がった。サロン 2002 では、2016 年 2 月より DUO リーグの事務局業務を受託し、会計業務やホームページの運用などを行っている。

これまで 20 年以上に渡って出場チームや実施形態 (リーグ編成など) を変えながら実施されてきた DUO リーグであるが、その理念は開始当初から全く変わっていない。その理念とは、負ければ終わりの ノックアウト方式だけではないレベルやニーズに応じたリーグ戦の実施により日常生活に無理なくサッカーを位置付けた 「歯磨き感覚」のサッカーライフの実現、1 つの学校やクラブから複数チームで出場することを認めることによる「補欠ゼロ」などであり、「サッカーを支える多様な人材の育成」も含まれている。

私にとっての DUO リーグ

私が入学した都立小石川高校は、前々年に高校サッカー選手権であと 1 勝すれば全国大会出場というところまで勝ち進み、サッカー好きの中学生の中でも知名度を上げていたため、私の同期にも都内の広い地域からサッカーを「プレーする」ことが得意な生徒が集まっていた。一方で、私は父親の影響で幼い頃からサッカーをしていたものの、「プレーする」ことはあまり得意ではなく、中学校時代から審判の資格を取り、プレーヤーとしてよりも審判などとしてチームに貢献することへの関心が大きい生徒であった。しかし、サッカー部に入ると新入生は一纏めにされ、試合がない時にも基礎練習や体力トレーニングなどのメニューが課せられ、いわば「プレーヤーとしてレギュラーを目指

す争い」に無理矢理入れられるような状況だった。幸いなことに小石川高校は DUO リーグに加盟していたため、新入生や B チームなどでも試合に出場する機会はあったものの、当時「サッカーを支える多様な人材を育成する」という意識は薄かったように思う。1年生の夏合宿頃までプレーヤーとしか見られない状況に大きな居心地の悪さを味わっていたことを今でも覚えている。そのような中で、唯一、クラブに貢献できる満足感を得られるのは、DUO リーグや他の試合で審判を務める時であった。

私の中で、高校サッカーへの関わり方が変わり、そ の後現在までスポーツに関わる活動を継続している きっかけは高校1年生の時に「DUOリーグ会議」に 参加し、優秀審判賞に選ばれた時からである。「DUO リーグ会議」は、定期的に加盟クラブの代表者が集 まる場であり、高校生もオブザーバーとして複数名 参加していた。私もオブザーバーとして参加したが、 MVP や得点王など各賞を選出していく中で、他の高 校の教員が優秀審判賞として私を推薦してくれたの だ。これまで高校入学前に審判の資格を取っているこ とを珍しがられることはあっても評価されることはな かったため、優秀審判賞を受賞したことは私に取って プレーヤー以外のサッカーへの関わり方が認められ たとても大きな出来事であった。その後、私は高校3 年生まで優秀審判賞を連続で受賞し、DUO リーグが 審判講習会を開催する際にはスタッフとして手伝っ た。審判講習会での動きが当時 DUO リーグチェマ ンを務めていた中塚理事長の目に留まりサロン 2002 にも参加するようになった。また、小石川高校では、 マネージャーとしてもサッカー部に参加するようにな り、裏方としてチームを支える喜びを味わうことがで きた。

サッカーを支える人材の育成

私は現在本業でラグビーワールドカップ 2019 や東京 2020 オリンピック・パラリンピックにも関わっているが、プレーヤーの何倍もの人数の職員やボランティアが大会を支えている。プレーヤーだけでは成り立たないことはメガイベントに限らず草サッカーなどのレベルでも同様である。しかし、高校の運動部では、プレーヤーばかりに焦点が当てられ、なかなか「スポーツを支える人材の育成」が意識されることは少ない。私の事例は単に 1 人の高校生の事例に過ぎないかもしれないが、ピッチの中よりも外の方が活躍できる生

徒ややりがいを覚える生徒はおそらく少なくないはずである。ぜひ今後も部活動が「スポーツを支える人材の育成」の場としての機能を担えるよう働きかけていきたい。

部活動とわたし一教員としての定点観測32年(継続中)

中塚義実

(筑波大学附属高校保健体育科教諭・蹴球部顧問 NPO法人サロン2002理事長)

「部活動とわたし」の続編を書くことにした。シンポジウム資料 (P.53 参照) には高校時代までのことを載せたので、次は学生・院生時代-筑波で過ごした7年間について書き始めたが、おもしろすぎて長くなりすぎた。別の機会にとっておくことにして、改めて「教員としての32年間」について書いてみた。ただしこちらもいろいろありすぎる。「部活動とわたし」は自分史でもある。

ここではいくつかのトピックを中心に、32年間の 定点観測を追っていきたい。

◆着任のころ-1987年4月前後(25歳)

筑波大学附属高校に着任したのは昭和 62 (1987) 年の4月だが、採用決定は3月。筑波で過ごした7 年間からいきなり東京での一人暮らしとなり、ドタバタで大泉学園のワンルームマンションに引っ越した覚えがある。

「採用決定です」の連絡は、まず電話でいただいた。教師の仕事はまず授業。ここに力を注ぐのは当たり前だが、自分の気持ちとしては「サッカー部の指導をしたい」が強かった。中高大院とさまざまなサッカー部にお世話になり、いよいよ教員としてのスタートである。部活動指導は教師として、とくに体育教師として当たり前だし楽しみでもあった。大学院時代に3年間コーチを務めた茨城県立竹園高校サッカー部の経験が大きかったかもしれない。「高校現場に行くとどっぷりつかるやろなあ」と漠然と思っていたのは、部活動、あるいはサッカーへの関わりが大きくなることの予感であった。

だから電話口で「採用決定です」と言われたとき、 すぐに「サッカー部の顧問の先生はどなたですか?連 絡先を教えてほしいのですが」と聞いたのは私にとっ て自然なことであった。「サッカー部をみさせてくだ さい」と直訴するつもりであった。さっそく電話し自己紹介したところ、まずは「よかったですねえ」。そしてこちらが言う前に「サッカー部の方もお願いします」と言ってくださった。これで部活の指導ができる。まずは一安心。

あとでわかったが、筑波大学附属高校の近くには、教育実習でお世話になった都立小石川高校や、大学院時代に夏合宿のコーチで2年間帯同した学習院高等科がある。いずれも高体連の同じ地区で、東京教育大サッカー部 OB がご指導されている。おそらくそちらからも「大学院出たてのいきのいいのが行くみたいだね」という話があったようである。

顧問の先生からは、「湘南高校との定期戦があるから時間があったらどうですか」と誘われ、もちろん出かけていった。着任前の春休みである。新宿駅の小田急線ホームで生徒たちと初顔合わせ。簡単に自己紹介したが、私服の、東京のサッカー部員は、それまで私がコーチをしていた茨城弁丸出しの兄ちゃんたちとは雰囲気が違う。そもそも敬語で話してこない。なれなれしい。「俺は田舎の高校生の方が合っている」と直感的に思った。

試合は前半から湘南が得点を重ね、終わってみれば 0-6 の完敗であった。ハーフタイムにコメントを求められたが、最初からひどいことを大阪なまりで言った記憶がある。「はじめて見たけど、これはサッカーか?お嬢さんがドレスを着てままごとやっとるような感じやな…」。そのとき頭にあったのは、竹園高校の泥臭いサッカーである。うまくはなかったが3年間、こちらも体を張って彼らと勝負してきた。最後の方はハートのある試合や練習ができるようになってきた彼らに比べ、東京の連中は「何でやらんの?」。これが最初の印象で、それはいまに続く(念のため言っておくが、私自身はスキルフルな、スマートなサッカーが大好きだし、プレーヤーとしても指導者としてもそち

らを志向してきたつもりである。ただその前に、貪欲に、がむしゃらに取り組む姿勢が必要であり、そこが欠けていると感じていた)。

4月8日。年度はじめの教官会議後、部活動担当の 先生から「ラグビー部の顧問をしてもらえないでしょ うか」と言われた。新任教師は前任者が受け持ってい た部の顧問になるのが常である。しかし私は「すでに サッカー部に顔を出していますので」と断る。新任の くせに生意気な奴である。いまではありえないが、当 時の私のわがままを受け入れてくれた学校には感謝で ある。しかしおそらく、どなたかがラグビー部の顧問 に回ってくださったのだろう。申し訳ない。

◆自分自身のトレーニングの場でもあった部 活動-1987~1995年度(33歳)

本校の部活動は週4日以内と制限されている。サッカー部は月水木土で、他に日曜日に練習試合が入ることが多かった(いまは火木金の練習と土日いずれかのゲーム)。

サッカー部の練習にはすべて参加した。指導者として、そしてプレーヤーとして。ちょうど関東リーグに 昇格したばかりの東京教員チームの一員となり、自分 自身のトレーニングも欠かせない。毎週木曜の夜に学 習院大と練習ゲーム、日曜日にはリーグ戦。生徒の試 合があるときは顧問の先生と要相談だが、とにかく日 曜日には何らかのサッカー活動があった。サッカー部 の練習以外でもあき時間に筋トレをしたり、学校近く の「ネズミ坂」で走りこんだり。とにかく体は動かし ていた。体育教師は体が資本である。

中でも毎週木曜日はハードだった。部活動を終えるのが17:30 すぎ。それから自転車をこいで目白の学習院大へ。18:30 ぐらいに学習院大との試合がはじまる。前半には間に合わないが後半から試合に出ていい汗をかき、終わったら皆で目白駅前の「とんかつフジ」へ行き、たらふくビールを飲んでとんかつを食う。2次会に行くことも多かった。それから学校に戻って自転車を置いて帰宅。こういうことを毎週やっていた。当時の仲間はいま、それぞれに齢を重ね、いい大人になっている。

学校の仕事は部活動が終わってから。勤務時間は(は じまりもおしまいも)気にしない。そういう学校だっ たし、いまでも多少はそのムードを残している。遅く まで教官室で仕事をするか、または"イベント"に繰 り出すのが常であった。 "イベント"のなかみは独身時代と結婚後で変わった。都内の一人暮らしは刺激が多くて楽しい。さまざまな飲み会を"イベント"と称して催していたのが独身時代。1990年に結婚してから自由度は低下するが、その頃から学校外のさまざまな研究会に携わるようになり、研究会後の飲み会も含めた"イベント"が充実する。日常生活を"知的活動"と"肉体的活動"と"イベント"で構成するライフスタイルは筑波時代(特に院生時代)から続くものである。

サッカーの研究会にも参加していた。いまのサロン 2002 につながるものである。

◆東京教員"卒業"と DUO リーグ創設 - 1996 年 4 月前後(34 歳)

当時の関東リーグは「教員リーグ」であった。東京・神奈川・千葉・埼玉・栃木…。そのうち東京ガスが昇格してきた。当初は軽くいなしていたが年々強くなり、いまでは FC 東京となってしまった。一方で我々は東京都リーグに降格し、何とか 1 部に踏みとどまっている状況だった。学習院大とのゲームもなくなり、各地を転々としてナイター練習をしていた頃、私は監督兼任となっていた。

1993年にJリーグが始まり、日本のサッカー界は激変する。オリジナル 10 にもれたフジタ工業(現湘南ベルマーレ)と、天皇杯の関東最終予選で対戦したのが 1994年の秋。試合は 1-10 の大敗だった。もし勝っていれば筑波大と甲府クラブ(現ヴァンフォーレ甲府)の勝者と関東代表決定戦、それに勝てば天皇杯1回戦で名古屋グランパスと当たるところまで決まっていた。そういうところとつながっているのがサッカーのいいところである。

翌 1995年シーズンは監督を外れ、その年度を最後に教員チームを"卒業"(引退とは言わない。アマチュアに引退なし)。私の重心は少しずつプレーヤーから指導者へ、そして「仕切りや」へとシフトしていく。

「Jリーグの発足とユースサッカーの将来」はその頃の私の重要テーマである。JFA 科学研究委員として5年間、全国大会出場選手・指導者対象の調査を行い、『高校サッカー年鑑』に報告を掲載した。スポーツ社会学で学んだことに加え、調査から得られたこと、自分自身の現場から見えることなどをもとにユースサッカーの将来構想を勝手に描いていた。

1996年2月11日のサッカー医科学研究会で「育成期の競技会のあり方」が取り上げられ、指定発言者

として、それまで考えていたことを 1 枚のレジュメにまとめ発表した。そこで示したリーグ構想をもとに 近隣の学校やクラブユースとともに DUO リーグをは じめたのがその年の 4 月である。

DUO リーグが始まり、本校サッカー部の目標も変わった。それまでは年3回の高体連の公式大会と、学習院や湘南との定期戦を軸に、シーズンを考えることなく年中サッカーをやっていたが、リーグ戦ができてシーズンが明確になった。「3年の夏の選手権に何人が挑戦し、どのような成果を残すかがその年度の評価である」と定め、「夏までやるのが当たり前」とし、そのために「日頃から勉強とサッカーの両立を」ということを、それまで以上に言うようになった。東京都高体連サッカー科学研究会で「スポーツライフマネジメント」を強調するようになったのもこの頃である。部活動を生活に位置付ける仕組みがリーグ戦であった。

このあたりの話は、今年度の公開シンポジウムで述べたとおりである。

◆学年主任としての 3 年間 - 2016 ~ 2018 年度(55 ~ 57 歳)

その後もいろんなことがあったが誌面が尽きてき た。直近の話に移ることにする。

年齢が上がるにつれて学校内外の仕事が増え、グラウンドに出られる回数は減ってきた。それでも何とか、少しでもグラウンドに顔を出すようにはしていた。

本校では3年間クラス替えがなく担任も変わらない。6度目の担任となる今回は学年主任となり、この3年間、部活動に出る頻度はめっきり減ってしまった。かつては仕事があっても練習優先、自分の仕事は勤務時間後にすればよかったが、同僚との打ち合わせはそうもいかない。会議や面談、打ち合わせだらけで、勤務時間内に処理しなければならないことが増えてきた。部員には悪いが校務優先である。

「部員には悪いが」と言ったが、逆に彼らはほっとしているかもしれない。「自分たちでやりたい」ニーズがあるのかもしれない。本校の生徒たちにはそうであってほしい。

この3年間はちょうど、「ブラック部活動」や「働き方改革」など、いろんなことが言われた時期と重なる。そして自分自身を振り返ると、確かにメチャクチャやってきたと感じる。自分自身の働き方改革をしていかなアカンなあと思うようになった。

担任学年である今年の3年生は、結果的にはかなり生徒たちが自主的に運営できたと思う。主将と副将が毎回私のところにやってきて「今日の練習」を確認し、自分たちで進める。いまは代替わりしているが、次の代になると「相談」も省略し、完全に自分たちで進めている。こちらも距離を置いている。試合には引率者として顔を出すし、練習の様子も少しはみに行くが、基本的には「自分たちでやっておけ」である。

いまどうなっているか。サッカーのなかみについては熱心に議論するが練習の量と質は減っている。自分たちで追い込もうとしない。そして何と言っても、サッカー前後のことについてはまったくできていないのが現状である。オフザピッチに目が向かないのは仕方のないことだろうか。

私の高校時代、練習内容も試合のメンバーも、全てキャプテンが決めていた。当時の練習日誌がいまだに手もとにあるが、なかなかよく書かれている。どん欲だったし夢中だった。だからだろうか、チームメート同士よくぶつかったしよく喧嘩した。練習をサボる奴を自転車置き場まで追いかけていったことは何度もある。何か問題があったらとことん話し合った。「2年生全員辞める事件」のときもそうである。すべてFace to Face。それしかなかった。

これからの部活動はどうあるべきか。いろいろ考える今日この頃である。

わたしたちの取り組み (年次報告)

SALON2002 月例会報告 2018.1~2018.12

2018年1月

日本と中国のユース年代のスポーツ環境を考える -中国のサッカー指導者と情報交換会-

中塚義実 (NPO法人サロン2002 理事長/筑波大学附属高等学校)

牧野Kenio Yao (成都市のサッカー会社)

通訳:鈴木稔(オーシャンズジャパン株式会社)

【日 時】2018年1月12日(金)18:30~21:10

【会場】筑波大学附属高校(東京都文京区)

【テーマ】日本と中国のユース年代のスポーツ環境を考える - 中国のサッカー指導者との情報交換会 (Sport for Tomorrow 認定事業)

【演 者】中塚義実 (筑波大学附属高校) & 牧野 Kenio Yao (成都市のサッカー会社)

通訳:鈴木稔(オーシャンズジャパン株式会社)

【参加者(会員・メンバー)9名】

安藤裕一 (㈱ GMSS ヒューマンラボ)、奥崎覚 (Qoly)、岸卓巨 (日本スポーツ振興センター)、斎藤芳 (桜丘高校)、笹原勉 (日揮)、鈴木稔 (オーシャンズジャパン株式会社)、張寿山 (明治大学)、中塚義実 (筑波大学附属高校)、守屋俊英 (世田谷サッカー協会)、

【参加者 (未会員) 3 名】本間主 (ルーヴェン高崎 FC)、守屋佐栄 (サポ)、国島栄市

【日本サッカーインスペクションツアー参加者 (中国側 13 名。北京・上海・成都など各地から)】

民間の育成を主とするクラブの指導者 3名

学校の先生(校長、教頭) 2名

スポーツマネジメント会社 2名

サッカーメディア 4名 ※大手ではなく、サッカーに特化した APP 系のメディア

オーシャンズスタッフ 2名

【報告書作成者】中塚義実&鈴木稔

今回は、オーシャンズジャパン株式会社と連携して「中国のサッカー指導者との情報交換会」を開催、Sport for Tomorrow 認定事業でもあった。

中国からの一行13名は、北京、上海、成都などそれぞれの地域より日本のサッカー事情視察に来日。Jクラブの指導現場の訪問、全国高校サッカー選手権の観戦などに数日かけた後、最終日に到着したのが筑波大附属高校。体育の授業(5限目のマット運動(1年生女子)、6限目のサッカー(1年生男子)を参観、放課後は部活動(サッカー、テニス、陸上競技、バドミントンなど)を見学した後に月例会となった。

鈴木氏が通訳をしながら中塚氏、牧野(Kenio Yao)氏がそれぞれ日中の体育ならびにサッカー事情について報告、これに続き情報交換ならびに意見交換がなされた。中国の方たちにとって教育とスポーツが密接に結びついた日本の学校体育や部活動はとても印象的だった様子。中国のスポーツ界でも指導者による暴力があるが、「学ぶ意欲のある指導者たちは暴力を振るわない、これからはそのような良い指導者が増えてくる」という言葉に中国のスポーツの未来を見ることができた。

2018年2月

FC United of Manchester. - イングランドのソシオ型スポーツクラブの紹介 -

張 寿山(明治大学教養デザイン研究科)

日時 2018年2月20日(火)19:00~21:00

【会 場】筑波大学附属高校 3F 会議室 (東京都文京区)

【テーマ】FC United of Manchester. イングランドのソシオ型スポーツクラブの紹介

- コミュニティへの貢献を最大の事業目的とするスポーツクラブ

【演者】張寿山(明治大学)

【参加者(会員・メンバー)11名】

安藤裕一 (㈱ GMSS ヒューマンラボ)、岸卓巨 (日本スポーツ振興センター)、木村康子 (㈱ミデア、ライター/エディター)、 小池靖(在さいたま市、サッカースポーツ少年団、指導者)、斎藤芳(桜丘高校)、嶋崎雅規(国際武道大学)、張寿山(明治大学)、 徳田仁(㈱セリエ)、中塚義実(筑波大学附属高校)、守屋俊秀(世田谷区サッカー協会)、吉原尊男

【参加者 (未会員) 6 名】柏田剛介、福士唯男 (アスリートプランニング)、藤原亮治 (筑波大学附属坂戸高校)、渡邊明志 (筑波大学附 属聴覚特別支援学校)、国島栄市、中西正紀(古今東西社)

【報告書作成者】守屋俊秀

FC United of Manchester(FCUM) は、 2005年に創設され現在ナショナルリーグ・ノース (6部、日本でいえば関東2部に相当)に所属してい るクラブです。マンチェスター・ユナイテッドの経営 が余りに商業化してしまったことに異議をとなえる古 くからのサポーターたちにより、もう一度地域に根 ざしたクラブを作り直すという理念の下で創設され た。ゼロからスタートして10年余りの活動を経て、 現在約2億円の収入と3000人程度の観客数、そし て4400人収容の新しいホームスタジアムの建設を 実現した。今ではサッカーの商業化の最先端を走って いるマンチェスター・ユナイテッドから生まれた、商 業化とは違うサッカーのあり方を目指しているクラブ



メインスタンド



メインスタンド最上階のパブ

2018年3月

ドイツ生まれのボール教室「バルシューレ」 の展開と可能性

福士唯男((株)アスリートプランニング バルシューレ事業部))

[日 時] 2018年3月20日(火)19:00~21:00

【会場】筑波大学附属高校体育館大アリーナ&ミーティングルーム(東京都文京区)

【テーマ】ドイツ生まれのボール教室「バルシューレ」の展開と可能性

【演者】福士唯男((株)アスリートプランニング バルシューレ事業部)

【コーディネーター】安藤裕一(㈱ GMSS ヒューマンラボ)

【参加者 (会員・メンバー) 7名】

安藤裕一 (㈱ GMSS ヒューマンラボ)、梅本嗣 (会社員)、加納樹里 (中央大学)、岸卓巨 (日本スポーツ振興センター)、中塚義実 (筑波大学附属高校)、守屋俊秀 (世田谷区サッカー協会)、山内直 (浦和レッズ)

【参加者 (未会員) 6名】 菊地美里 (ヨガインストラクター)、糀正勝 (インタースポーツ)、福士唯男 (アスリートプランニング)、守屋佐栄 (フランス W 杯へ行くぞ、なでしこ)、諸澄孝宜 (理学療法士)、渡邊明志 (筑波大学附属聴覚特別支援学校)

【報告書作成者】菊地美里

前半は体育館で演者の指導のもと参加者がバルシューレを実演。様々な運動要素を取り入れた「ボールを使った運動(遊び)」を体験した。それぞれ一生懸命にプレー、上手く出来たり出来なかったりするが、時に笑いが飛び交い楽しく汗をかいた。









そして後半ではバルシューレの歴史、基本的な理論、日本での活動、そして中国への展開といった内容で、写真などのスライドを交えながら講演が行われた。「遊びは本来子どもが見つけるものだが、現代の子どもは自分で見つけることが下手なので、バルシューレが遊ぶきっかけになれば良い」という言葉に演者の目指す思いが込められていた。

2018年4月

「高校サッカー百年」をめぐって -部活動のあり方を考える-

中塚義実(筑波大学附属高校/NPO法人サロン2002 理事長)

【日 時】2018年4月26日(木)19:05~21:10(終了後は「景宜軒」~0:30ごろ)

【会場】筑波大学附属高校 3F 会議室

【テーマ】 高校サッカー百年をめぐって - 部活動のあり方を考える

【演者】中塚義実(筑波大学附属高校/『高校サッカー百年』編集委員/全国高体連活性化委員長)

【参加者(会員・メンバー)10名】

岸卓巨(日本スポーツ振興センター)、北原由(都立武蔵高校)、小池靖(在さいたま市/サッカースポーツ少年団コーチ)、小山基彰 (ヒーローインタビュー)、斎藤芳 (桜丘高校)、嶋崎雅規 (国際武道大学)、竹中茂雄 (東海道品川宿 FC)、中塚義実 (筑波大学附属高 校)、守屋俊秀(世田谷区サッカー協会)、吉原尊男

【参加者(未会員)4名】

守屋佐栄、渡邊明志 (ろう学校)、国島栄市、ほか1名

【報告書作成者】中塚義実

- I.「高校サッカー百年」を振り返って
- 1. 前 史 … 日本へのサッカー伝来と東京高師の功績
- 2. 大戦前 … 学校中心の育成システムの確立/教育 と競技の問題 (野球統制令) /戦時体制下
 - 1) 初期 (分立の時代): 1918年~1925年 (大正 7年~大正14年)
 - 関西、関東、東海など各地に大会が分立してい
 - 2) 中期(並立の時代): 1926年~1933年(大正 15年~昭和8年)
 - 大阪毎日新聞社 (大毎) 主催の大会が地域予選を 始めたが、他の地域の大会も並立していた。
 - 3)後期(統一の時代):1934年~1947年(昭和 9年~昭和22年)
 - 中等学校選手権の全国大会として統一された。 戦中の中断や戦後の再建の時期を含む
- 3. 大戦後 …新制高校と高体連の誕生/高校総体創 設/テレビ放送と首都圏開催/ Jリーグ発足
 - 1) 高校選手権のスタート 敗戦後の学制改革/新制中学の空白
 - 2) 高校総体開始と毎日新聞の撤退 高校総体の発足 / 苦戦の協会独自開催
 - 3) 民放参入と首都圏開催 民放テレビの全面的参画/テレビ局主導の開催 地移転と観客急増/高体連の組織力とレバルアップ

- 4) Jリーグの発足とその影響
 - プロリーグの誕生/クラブ・ユースとの関係/ 学校スポーツの課題
- 4. いま… 日本のスポーツ界をリードするサッカー 界 → 学校と地域クラブの共存

ユースリーグ/ U-18 フットサル/女子の台頭 前半は、上記のように「高校サッカー百年」の流れ がざっくりと紹介された。

その後、現在発刊準備中の『高校サッカー百年』の 編集方針と内容が紹介された。高体連では、今まで 40年誌、60年誌、90年誌と正史を編纂してきて、 その集大成となるのが『高校サッカー百年』である。

最後に、これからの部活動のあり方について語られ た。具体的には、

- 1. 目指すべき部活動の姿を示す
 - 1) 安全で安心な部活動を目指して
 - 2) 多様な価値観の受け皿となる部活動を目指して
 - 3) 自主性や創造性を育む部活動を目指して
 - 4) 学校生活を構成する「学校文化」として
- 2. スポーツと教育のあるべき姿を示す
 - 1) 勝利至上主義の弊害とゆたかなスポーツ文化の 享受
 - 2) オリンピック教育の可能性と実践事例
- 3. 学校教育における部活動の位置づけと、その解決 策を示すのようなイメージである。

さらに、筑波大学附属高校蹴球部の事例が紹介された。蹴球部は、歴史と伝統ある11人制のサッカー部。レベル的には大したことはないけどそれなりに一所懸命取り組んでいる。また、あるとき女子部員が入部し、今では部員が一番多い女子部。フットサル部も、バリバリの競技志向はいやだけどボールを蹴るのは好きという生徒が作った部門。これら3部門(チー

ム)が一つのクラブを構成している。夏合宿は3部門合同で行い、3部門合同でクラブの取り組みとして、年2回の昼休みフットサル大会が挙げられる。「サッカー部は幅広くいろんな人を受け入れるべきだ」という主張のもと、「おもしろい」取り組みが続けられている

2018年5月

ワールドカップのグループリーグから フェアネスを考える

井上俊哉 (大妻女子大学)

【日時】2018年5月22日(火)19:10~21:00

【会場】筑波大学附属高校 3F 会議室

【テーマ】ワールドカップのグループリーグからフェアネスを考える

【演者】井上俊也(大妻女子大学)

【参加者 (会員・メンバー) 7名】

井上俊也 (大妻女子大学)、大河原誠二 (桐窓サッカー倶楽部)、笹原勉 (日揮)、関秀忠 (弁護士)、中塚義実 (筑波大学附属高校)、守屋俊秀 (世田谷区サッカー協会)、吉原尊男

【参加者(未会員)4名】

守屋佐栄、佐藤雄大(桐窓サッカー倶楽部)、国島栄市、霧島剛

FIFA ワールドカップのグループリーグは 1998 年大会から方式が変わりました。それまでは基本的に、シード国は特定の会場で試合を行い、各グループリーグは特定の会場で行われていましたが、1998 年大会以降、各チームは所属するグループに関係なく、ランダムな会場で試合をするようになりました。開催都市のファンにとってはバラエティに富んだチームの試合を見るという楽しみができた反面、各チームは多くの移動を伴うことになりました。

日本はサランスクでコロンビア戦、エカテリンブル クでセネガル戦、ボルゴグラードでポーランド戦を戦 い、首位突破の場合はモスクワ(スパルタク)、2位通過の場合はニジニ・ノブゴロドでノックアウトステージの初戦を迎えます。この間の移動距離は首位通過の場合3,335キロ、2位通過の場合3,285キロです。この距離はロシアという広大な国での大会において長いのでしょうか、短いのでしょうか。そして移動距離の一番長い国と短い国の格差は4倍近くになります。

サッカーのワールドカップだけではなく、来年日本で行われるラグビーワールドカップの事例とも比較しながら、メガスポーツイベントにおけるフェアネスとは何なのかを考えた。



2018年6月

特定非営利活動法人サロン 2002 2018(平成 30)年度 第 1 回(通算第 4 回)総会

開催日時: 2018 (平成 30) 年 6 月 10 日 (日) 16 時 30 分~ 17 時 30 分

開催場所: 筑波大学附属高校 2F 応接室

出席状況: 社員総数 31 名 有効出席数 19 名 (うち 12 名が委任状) 議決権総数: 31 個 有効議決権数: 19 個 (うち委任状 12 個)

定刻、当法人の規程により理事長中塚義実氏は総会の開会を宣言し、事務局より社員総数、議決権総数、有効出席数及び有効議決権数について報告を行い、本総会は適法に成立する旨を宣言し、直ちに議決の審議に入った。

議長には、総会出席社員の中から笹原勉氏、議事録 署名人には中塚義実氏、松下徹氏が選出された。

以下の各議題について、それぞれ質疑が交わされた うえ、承認された。

- 1) 2017 年度事業報告
- 2) 2017 年度決算及び監査報告
- 3) 2018 年度事業計画
- 4) 2018 年度予算
- 5) 借入の実施
- 6) 役員の承認
- 7) 定款の変更

2018年7月

セネガル料理を食べながら聞く FIFA ワールドカップ ロシア大会報告 一ホットな現地の様子を生き生きと一

徳田 仁(観戦ツアー主催者の立場から) 守屋俊秀(観戦ツアー参加者の立場から) 笹原 勉(きままな旅行者の立場から)

【【日時】2018年7月26日(木)19:00~21:30

【会 場】 セネガル料理屋「Cafe Bar Blue Baobab」(港区麻布台 2-2-12 三貴ビル 2F) 日比谷線神谷町駅より徒歩6分/大江戸線赤羽橋駅より徒歩6分/日比谷線六本木駅から徒歩 15 分

【テーマ】 セネガル料理を食べながら聞く FIFA ワールドカップロシア大会報告 一ホットな現地の様子を生き生きと一

【演者】徳田仁(観戦ツアー主催者の立場から) 守屋俊秀(観戦ツアー参加者の立場から) 笹原 勉(きままな旅行者の立場から)

【参加者(会員・メンバー)15名】

今廣佳郎 (会社員)、奥山純一 (フットリンク運営者)、金子正彦 (会社員)、岸卓巨 (日本スポーツ振興センター)、木村康子 (フリーライター)、齊藤宣彰 (会社役員)、笹原勉 (日揮㈱)、白井久明 (弁護士)、竹中茂雄 (東海道品川宿 FC)、田中理恵 (会社員)、張寿山 (明治大学)、徳田仁 (株式会社セリエ)、中塚義実 (筑波大学附属高校)、守屋俊秀 (世田谷区サッカー協会)、吉原尊男

【参加者(未会員)15名】

稲富健(会社員)、上田美亜 (NPO 法人 Alazi Dream Project)、神谷隼人 (オフィス神谷)、国島栄市 (ビバ!サッカー研究会)、 笹原佐永子、鈴木崇正 (会社員)、藤田実樹 (順天堂大学)、守屋佐栄、凌竜也 (会社員)、他 6 名

【報告書作成者】徳田仁、守屋俊秀、笹原勉

1. FIFA ワールドカップロシア大会報告①徳田仁: 観戦ツアー主催者(株式会社セリエ代表取締役)

日本戦の参加者数は、サランスク:約140名、エカテリンブルグ:約200名、ヴォルゴグラード:約180名、ロストフ:約20名だった。3戦目を終えてからR16を見るために日程を延長した方は1名のみ。

オフィシャルツアーはチケットをすでに所有している 人用にツアーを造成しているが、弊社では従来通り基 本的にチケットを含んだツアーを企画し、チケット所 有者は割引する方式で募集しました。

今大会からは、FAN ID というビザの代わりになる 証明書をFIFA が発行することになり、インターネット経由でこの手続きが出来ない方に関しては弊社で代 行しました。これが大変でした。参加者数は全体 (開幕 戦〜決勝戦) で約 450 名。そのうちチケットを自身で 確保した方の比率は約 31%でした。



写真はエカテリンブルグ(6/24 日本 vs セネガル)の参加者です。(約200名)

WHAT's ロシア

- (1)気候・・・夏は意外と暑い、しかしエアコン は無い
- (2) 文字・・・キリル文字のため読めないが、読 めないとメトロに乗れない
- (3) 交通・道路事情・・・南ア、ブラジルにも あったがロシアに無い もの
- (4)建物・・・5 階建て以下はエレベータ不要 の法律
- (5) 気質・・・大会中はやさしい、親切という評 判だったが本質は?
- (6)食事・・・ロシア料理って? すしやラーメ ンが人気
- (7) お酒・・・本来はスタジアムでのアルコール は厳禁

WCとは移動である!!

守屋俊秀

出発	到着	交通手段	振算距離
自宅(東京)	成田	自車	85
咸田	ドバイ	エミレーツ	8,000
ドバイ	モスクワ	エミレーツ	3,648
モスクワ	サランスク	パス	485
サランスク	モスクワ	アエロフロート	485
モスクワ	エカテリンブルク		1,411
エカテリンブルク	モスクワ		1,411
モスクワ	ポルゴグラード	↓	871
ポルゴグラード	モスクワ	エスセブンエア	871
モスクワ	ロストフ・ナ・ドヌー	ウラルエア	918
ロストフ・ナ・ドヌー	モスクワ	エスセブンエア	918
モスクワ	ドバイ	エミレーツ	3,648
ドバイ	成田	エミレーツ	8,000
成田	白宅(東京)	台車	85

30.836 km

40.075 km

2. FIFA ワールドカップロシア大会報告②守屋俊秀:観戦ツアーに参加



想像以上の多民族、移民



ワールドカップはいつも超フレンドリー

3. FIFA ワールドカップロシア大会報告③笹原勉:個人で手配し、きままに旅行





2018年8月

FIFA ワールドカップ討論会 一ロシア大会での事例をめぐって一

- 1. 日本vsポーランド戦における日本代表(西野監督)の選択について 中塚 義実(筑波大附属高校)
- 2. VAR (ビデオアシスタントレフェリー) の導入について 小幡真一郎 (JFA1級インストラクター)
- パブリックビューイング」をめぐって 松井完太郎(国際武道大学)
- 【日 時】2018年8月27日(月)19:00~21:00(終了後は「景宜軒」。閉店まで盛り上がる)
- 【会 場】筑波大学附属高校 3F 会議室 (〒112-0012 東京都文京区大塚 1-9-1)

【テーマ/話題提供者】FIFA ワールドカップ討論会 - ロシア大会での事例をめぐって

- 1. 日本 vs ポーランド戦における日本代表 (西野監督) の選択について/中塚義実 (筑波大附属高校)
- 2. VAR (ビデオアシスタントレフェリー) の導入について/小幡真一郎 (JFA1 級インストラクター)
- 3. 「パブリックビューイング」をめぐって/松井完太郎(国際武道大学)

【参加者(会員・メンバー)15名】

大河原誠二(桐窓サッカークラブ)、奥崎覚(Qoly)、小幡真一郎((公財)日本サッカー協会)、笠野英弘(山梨学院大学)、木村康子(ライター)、小池靖(サッカースポーツ少年団コーチ/在さいたま)、斎藤芳(桜丘中学高等学校)、笹原勉(日揮)、嶋崎雅規(国際武道大学)、白井久明(弁護士)、徳田仁(㈱セリエ)、中塚義実(筑波大学附属高校)、本多克己(㈱シックス)、皆川宥子(東京大学)、守屋俊英(世田谷サッカー協会)、

【参加者(未会員)5名】

鈴木崇正 (NEC マネジメントパートナー)、松井完太郎 (国際武道大学)、守屋佐栄、済木崇、国島栄市 【報告書作成者】田崎 蒼 (国際武道大学)

1. 日本 vs ポーランド戦における日本代表 (西野監督) の選択について

中塚義実 (筑波大附属高校)

0-1で日本が負けていたポーランド戦の終盤、他会場で同時に行われていた試合で、コロンビアがセネガルを1-0でリード。試合がそのまま終われば、日本とセネガルは勝ち点で並び、警告の総数で下回る日本が決勝トーナメントへ進む状況だった。西野朗監督は後半37分に長谷部誠選手を投入し、パスを回してスコアを維持することなどをチームに徹底した。

この件については、直後から賛否両論が起きた。 日本のメディアは「日本はここまでできるようになった」と肯定的にとらえる報道がほとんどだった。その中で、朝日新聞の忠鉢信一氏は「試合途中で負けを意図することはフェアプレーに反する」と厳しい意見を述べた。私たちも、このことについて、参加者同士で 意見を交わした。

「スポーツは楽しむことが目的で、勝つことがすべてではない」という否定的な意見や、「西野監督は、当日の気温など様々な点を考慮してこの選択をしたのではないか」という肯定的な意見など、有意義な議論が交わされた。

2. VAR (ビデオアシスタントレフェリー) の導入に ついて

小幡真一郎(JFA1級インストラクター)

VAR や AVAR (ビデオアシスタントレフェリー) について日本でも 2020 年の東京オリンピックを目指して実験をしている。VAR の目的は「試合を再審判しない」こと。対象は「判定が明白な間違いであること」と「見逃された重大な事象」であること。この二つが対象になる。

FIFA は、①主審は常に決定しなければならない、 ②主審のみがレビューを開始できる、③レビューに時 間的制約はない-正確さは速さより重要である、④主 審は透明性を確保するために可能な限りレビューは目 に見えるところに留まる、⑤最終決定は主審によって 行われる、⑥元の決定がはっきりした明白な間違いで あるときのみ変更される、という原則を掲げてロシア ワールドカップに向かった。VAR が関わる事象とし て、①得点、② PK、③一発退場、④退場・警告など の人間違いの4つが挙げられている。

64 ゲームのうち 455 シーンチェックをしたと FIFA は言っている。 1 試合につき 7.1 回シーンを チェックした。レビューが20シーン。決勝トーナメ ントに入るとチェックが減少した。審判がうまくなっ た。ばらつきがなくなった。

ディスカッションとしては、試合の流れが止まって しまうのではないかという懸念や、ミスジャッジも 含めてフットボールではないかという議論がなされ た。しかし、サッカーが大きなビジネスに発展し、一 つの判定が、チームや選手を左右しかねない状況にあ ることも語られた。

小幡さんは、「たぶん VAR は続いていくと思われ るが、今後 VAR とどう付き合っていくかがレフェ リーの今後の課題であると考えられる」と締めくくら れた。

「ロマン派」という言葉が、やけに印象に残った。

3. 「パブリックビューイング」をめぐって 松井完太郎 (国際武道大学)

2014年の FIFA ワールドカップの時に大阪市都 島区が「都島が生んだ柿谷選手を応援しよう」と都島 区在住・在勤・在学の人達を対象に非商業・無料のパ ブリックビューイング行う告知をホームページでした ところ、バッシングされました。非商業・無料でも5 万円のライセンス料金を払わないといけなかったので す。電通メディアパートナーズは「公共団体なのに未 申請・未払いは聞いたことがない」とコメントしまし た。実は、多くのスポーツ少年団サッカーチームなど が小学校の体育館を借りて非商業・無料のパブリッ クビューイングを開いていて、「子どもたちのニッポ ン!コールで盛り上がりました」などとホームページ にアップされていたのですが、騒動が起こった直後に 次々と消されていきました。

2015年FIFA女子ワールドカップの時の電通 によるパブリックビューイング実施ガイドラインで は、非営利・無償であっても「映像を拡大する特別の 装置 | を使った場合はライセンス料 5 万円と設定さ れました。

ロシア大会アジア最終予選における電通のパブリッ クビューイング実施ガイドラインでは、一気にライセ ンス料が値上がりし、「映像を拡大する特別の装置| を使うと非営利・無償でも最低でも約29万円のライ センス料を支払わなければいけないことが示されまし た。

この状況を今変えないと、来年のラグビーワールド カップ、再来年のオリンピック・パラリンピックで は、体育館に生徒が集合して応援する体験を、日本の 子どもたちにさせることはできないでしょう。たとえ ば「学校で生徒・その家族を対象にする時はOK」と 最初から明示するべきです。スポーツを普及するミッ ションを持った組織、もしくは、そのミッションを託 された組織が明確な基準を提示すべきだと思います。

2018年10月

文京ラグビースクールにおける学び 一ラグビースクールが果たすべき役割―

齋藤 守弘 (日本ラグビーフットボール協会企画部担当部長/文京ラグビースクール校長)

【日時】2018年10月24日(水)19:10~21:30(終了後は「景宜軒」。閉店まで盛り上がる)

【会場】筑波大学附属高校 3F 会議室 (〒112-0012 東京都文京区大塚 1-9-1)

【テーマ】文京ラグビースクールにおける学び ―ラグビースクールが果たすべき役割―

【演者】齋藤 守弘(日本ラグビーフットボール協会 企画部 担当部長/文京ラグビースクール 校長)

【コーディネーター】嶋崎 雅規(国際武道大学)

【参加者 (会員・メンバー) 8 名】

小池靖 (さいたま市 / サッカースポーツ少年団指導者)、小山基彰 (部活動応援プロジェクト YELL 代表)、嶋崎雅規 (国際武道大学)、張寿山 (明治大学)、名方幸彦 (文京教育トラスト)、中塚義実 (筑波大学附属高校)、皆川宥子 (東京大学大学院)、守屋俊英 (世田谷サッカー協会)

【参加者 (未会員) 2 名】齋藤守弘 (日本ラグビー協会)、守屋佐栄

【報告書作成者】名方幸彦(文京教育トラスト)

文京ラグビースクールを始めた動機からお話しします。自分がラグビースクールを立ち上げたときに考えたことは、「ラグビーをする場づくり」です。できるだけ、シンプルにしたいと思いました。ラグビーを教えるのではなく、ラグビーを通じて教育がしたいと思いました。日曜日の午前中にのんびりとすることも悪くはないですが、早起きしてグランドに行く、子供たちにそういう時間を提供できればと思いました。そこ

はラグビーをする場であり、見る場であり、集まる場であり、教える場であり、そのような場づくりをしたかったです。

基本的にラグビースクールはどこでも5つのカテゴリーに分けて運営しています。幼児クラスは年少から年中まで、低学年クラスは小1と小2、中学年クラスは小3と小4、高学年は小5と小6です。これに加えて中学生のクラスです。ラグビーは低学年







(小1,2年生)はミニラグビーで5人制、中学年(小3,4年)で7人制、高学年(小5,6年生)で9人制となります。2015年には、ようやく最初の3年生が高学年になって幼児から6年生までのスクールの体制が整ってきました。一方で、人数が増えてくると、出席率が落ちてきました。現在の出席率は約7割です。登録者は180名程度なので、コンスタントに130~140名程度の参加者がおります。

次の課題はコーチの確保です。ラグビー練習はコーチの人数がサッカーに比較するとたくさん必要です。大体児童 4-5 名に 1 人のコーチが求められています。今は 50 名がコーチ登録しており、毎回 35 名前後のコーチ・スタッフがボランティアとして参加しています。

会費ですが、ラグビースクールでは月 1,000 円ほどの会費が主流です。当スクールは入会金はありません。ですから年間参加して 1,000 円× 12 ケ月= 12,000 円の年会費ですべて賄っています。

特筆すべきイベントである夏の菅平合宿(2泊3日)は今年も、総参加者151名(児童92名、スタッフ38名、保護者21名)の参加で実施しました。小学校1年生から6年生まで2泊3日の合宿を通して大きく成長する姿に接することは校長としても毎年嬉しく思っています。夏合宿で他のスクールと違うことをあげれば、学習の時間を設けて毎朝30分勉強を行っているところです。ラグビー合宿でもいつでも勉強は

おろそかにしない姿勢を身につけてもらいたいと思っているからです。

もうひとつの特筆すべきイベントは、ヒーローズカップ (小学生高学年の日本一のチャンピンシップ)です。この大会への参加については、いろんな意見がありました。「小学校レベルで全国大会というのは無理がある。チャンピオンを目指すようになると勝利至上主義になりスクールの練習が勝つためのものになり基本の目的が損なわれてしまう。」などです。当スクールも当初は参加を見送ってきましたが、昨年から参加を試験的にしました。

今後の課題のひとつは、スタッフのレベルアップです。子どもが成長するためには、まずコーチがしっかりしないといけない。コーチが適切なスキルを持つことが大事です。そのためにさまざまな講習にも参加してもらっています。

【参加者の声】

- ・ヒーローズカップについて疑問を持っていたことに 賛同しました。サッカーもチャンピオンを選出する 読売ランドの大会があったが、子供たちがゆがんで いるなと感じたことがあります。
- ・ラグビーをやるんだという考えだと、なかなか組織 づくりを考えたりしないのですが、組織づくりをど うしようかよく考えられているようで、感心しまし た。





2018年11月

サッカーの戦術を構築する

北田 典央

- 【日 時】2018年11月17日(土)17:25~19:30(終了後は「景宜軒」。22時過ぎまで盛り上がる)
- 【会 場】筑波大学附属高校 3F 会議室
- 【テーマ】サッカーの戦術を構築する
- 【演者】北田典央(所属なし、会社員)

【参加者(会員・メンバー)6名】

北田典央 (会社員 / サッカー好き)、小池靖 (さいたま市 / サッカースポーツ少年団指導者)、斎藤芳 (桜丘高校)、徳田仁 (㈱セリエ)、中塚義実 (筑波大学附属高校)、守屋俊秀 (世田谷サッカー協会)

【参加者(未会員)3名】

守屋佐栄、吉井柊二(日体大4年/筑駒コーチ)、国島栄市

【2次会終盤から参加】竹中茂雄

【報告書作成者】斎藤芳(桜丘高校)

本日の目的は、戦術とは何かということを明確化して、その後に戦術を体系化することにある。みなさんと議論して、まとめていきたい。

サッカーにおける戦術とは勝利のための手段、方 策。戦術構築は、勝利をするために監督必須のスキル である。戦術を品質高く構築できていないと勝てな い。具体的には、うまくプレーできない、入らない シュートを打ち続ける、シュートの場面でボールを回 してしまう。たとえ戦術が構築できたとしても伝える スキルがなければ選手たちは動けない。伝わらず練習 で何をしていいかがわからない。

勝つためにどのような練習をすればよいか

- 1) 実際を集めて目的と結びつける方法 (事実から練習方法を積み上げていく方法:帰納ア プローチ)
- 例1)パスがうまく回せなかったのでパスを練習する。
- 例 2) 相手に当たり負けしたので筋トレをする。

メリット:選手が原因を認識しているので練習をし やすい。

デメリット:一番良い選択をしているとは限らない。

- 2)目的を分解して手段と結びつける方法 (演繹アプローチ)
- 例 1) ゴールを奪う、ボールを奪われない、ゴールを 奪われない、ボールを奪う。

メリット:手段を網羅できるので一番良い選択をで

きる可能性が高まる。

デメリット:抽象度が高く選手が何をやればよいのかわかりづらくなる。

まとめ

戦術体系をしっかりと盛り込んで作れると勝てるということを伝えたい。しかし、様々な制約や年代によってやることは変わってくるので、見極めが必要。勝利する状態から考える。その次にボールを奪う、ボールを取られない、ゴールを守るなど。プロセスの構築の順番は、ゴールを奪うから考える。

2018年12月

月例会=忘年会兼お宝映像上映会

【日 時】2018年12月21日(金)18:00~21:50ごろ(中締め。最後は23:30ごろまで)

【会 場】ティアスサナ Tia Susana

【参加者(会員・メンバー)6名】

金子正彦、岸卓巨 (JISS)、斎藤芳 (桜丘高校)、茅野英一 (帝京大学)、中塚義実 (筑波大学附属高校)、 守屋俊秀(世田谷サッカー協会)、吉原尊男

【参加者(未会員)5名】

守屋佐栄、岸卓巨妻子、国島栄市、藤井一朗 (桐窓サッカー倶楽部)

【大まかな流れ】

18:00 前後 ボチボチ集まってきたところで乾杯

- 18:20 頃 「予習」してきた吉原氏より"お宝映像"「1970 年準々決勝ブラジル vs ペルー」の解説。吉原氏がサッカーを始めた 中学生のころ「ダイヤモンドサッカー」で見た記憶があるという。会場はグアダラハラのハリスコ・スタジアム。標高 は 1,400m ほどか。キックオフ時刻は 12 時。選手の影は足元にしかない。ブラジルのメンバーは豪華絢爛。背番号 は 1 ~ 11。登録番号制ではあったが、当初からの「ベストメンバー」なのだろう。ペルーの主将はエクトル・チュン ピタス。来日したときティアスサナに来たそうだ。テオフィロ・クビジャスの名前もある。1978年にも出ている選手 なら私もよく覚えている。試合が楽しみ。
- 18:30頃 上映開始。まずはペルー国歌。続いてブラジル国歌。今だと FIFA の大会で国歌演奏は 1 分程度に縮められているが、 この頃はフルバージョンでやってくれる。ブラジル国歌もなんだかゆっくり目の印象。時間がゆっくり流れていた時代 か。ブラジル選手が全員(ペレも)直立不動だったのはおもしろかった。
- 18:40頃 キックオフ。
- 19:30頃 前半終了。ここでいったん映像を止めて、自己紹介・近況報告タイム。「一人持ち時間上限2分」のはずだったが、終 わるわけがない。
- 20:10頃 後半開始。最後まで集中して見ていた組と、会話に夢中になっている組に分かれた感じ。私は食い入るようにみてい た。おもしろすぎる!
- 21:00頃 試合終了。しばらく試合の話題で盛り上がる。
- 21:50頃 中締め。そこでティアスサナのマスターから御礼のご挨拶とともに、同じ場所で、サッカー居酒屋ができるとのこと。 後継店の店長 (FC 東京サポのお店をやっていた方) のご挨拶。そして集合写真。ここから先は三々五々。1970年の1 次リーグ、ブラジル vs イングランドを見ながらうまいワインを楽しんだ。
- 23:30頃 終了・解散



E

5

8

7

7

9

6

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

第3回 U-18 フットサルリーグチャンピオンズカップ

主催者メッセージ

リーグ戦は最高の"あそび"一第3回大会を終えて

U-18フットサルリーグ チャンピオンズカップが、はじめて信州で開催されました。

初日の代表者会議では、この大会の二つのねらい、「U-18年代のレベルアップ」と「日常的なリーグ環境の整備」について、主催者の思いを熱く語らせていただきました。

ベスト4のうち3チームがFリーグの下部組織です。「U-18年代のレベルアップ」の背景が理解できます。その中で優勝したのが京都 橘高校サッカー部であることも、この年代の育成・強化の多様性が感じられます。U-18年代にはさまざまなクラブが存在します。レベ ルやニーズに応じて「日常的なリーグ環境の整備」を進めてください。夜の指導者懇親会ではゲームの話とともに、各地のリーグ戦の 様子が語られました。こういう機会は大事ですね。

ここで改めて、私たちが考える「リーグ環境」「リーグ戦」について述べておきます。

リーグ戦は "組織"です。特定の個人や業者に任せて「総当たり戦を行う」ものではありません。ゲームを楽しむ人たち自身で自分たちの活動をささえる--自主運営と受益者負担が原則です。ささえる活動を楽しむマインドが根底にあります。

リーグ戦は"生活"です。平日のトレーニングと週末のゲームで1週間の「サイクル」を形成し、リーグ期間が「シーズン」となります。ワンデーマッチで「総当たり戦を行う」ことではありません。リーグ期間をどこに持っていくかは大きな課題です。地域ごとの事情もあるでしょう。皆さんからのご意見をいただければ幸いです。

リーグ戦は"あそび"です。"あそぶ"の前につける形容詞は「自然に」「ちゃんと」「本気で」「徹底的に」がふさわしいでしょう。定期的に"あそぶ"仕組みがリーグ戦です。言われたから「総当たり戦を行う」のではありません。やりたいから、やりたい人がやるのです。

NPO法人サロン2002の"志"は「スポーツを通してのゆたかなくらし」です。それは徹底的に"あそぶ"ことが根底にあります。「生きる」だけならなくてもよいが、「よりよく生きる」には欠かせない文化であるスポーツやアートの原点にある"あそび"を、私たちは大事にしています。

主管の長野県フットサル連盟はじめ運営に携わってくださった方々、そしてスポンサーとしてささえてくださった方々、応援してくださった方々、ほんとうにありがとうございました。

来年も、その先も、totoの助成を受けながら、しっかりとこの大会を支え続けてまいります。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

特定非営利活動法人サロン2002 理事長 **中塚 義実**

U-18フットサルのあゆみ

●JFA 全日本U-18フットサル選手権大会

主催 公益財団法人日本サッカー協会

主管 一般社団法人宮城県サッカー協会

後援 スポーツ庁、仙台市、スポーツコミッションせんだい

開催年	優勝チーム	会場
2014年	聖和学園FC(宮城)	大田区総合体育館、墨田区総合体育館
2015年	岡山県作陽高校(岡山)	ゼビオアリーナ仙台、仙台市体育館
2016年	帝京長岡高等学校(新潟)	ゼビオアリーナ仙台、仙台市体育館
2017年	 矢板中央高等学校(栃木)	ゼビオアリーナ仙台、
20174	大阪中失向寺子仪(栃木)	カメイアリーナ仙台(仙台市体育館)
2018年	帝京長岡高等学校(新潟)	ゼビオアリーナ仙台、
20104	市尔英则同守子仪(机海)	カメイアリーナ仙台(仙台市体育館)

●グリーンアリーナ神戸カップフットサルフェスティバル

夏休み期間に特定非営利活動法人神戸アスリートタウンクラブを主催として開催されるフェスティバル。

開催年	優勝チーム	準優勝チーム
2012年	SAKUYO Coracao de Verde	神戸国際大学附属高校
2013年	名古屋オーシャンズU-18	SAKUY0
2014年	岡山県作陽高校	エンフレンテ熊本
2015年	SAKUY0	名古屋オーシャンズU-18
2016年	フウガドールすみだファルコンズ	サントス サッカーショップ
2017年	OKAYAMA SAKUYO	フウガドールすみだファルコンズ
2018年	SBFCロンドリーナ U-18	ASV PESCADOLA町田U-18

●GAViC CUP ユースフットサル選抜トーナメント

2012年に「U-18フットサルトーナメント」として創設。

2015年からは名称を変更し、全国9地域から選抜された12チームで大会が開催されている。

開催年	優勝チーム	会場
2012年	名古屋オーシャンズU-18 (愛知)	オーシャンアリーナ
2013年	瀬戸内高校(広島)	オーシャンアリーナ
2014年	幕張総合高校(千葉)	駒沢体育館
2015年	愛知県選抜U-18	墨田区総合体育館
2016年	U-18新潟県選抜	墨田区総合体育館
2017年	U-18新潟県選抜	墨田区総合体育館

●フットサルフェスタ(旧ホンダカップ)

1997年から開催されているフェスティバル大会に2010年からU-18カテゴリーを設定。

関東・東海・関西で予選大会が開催されている。

開催年	優勝チーム	準優勝チーム
2010年	名古屋オーシャンズU-18	さくようフットサル部
2011年	府中アスレティックFCユース	作陽 Oito Soldados
2012年	SAKUYO Nao admitem	武相高校
2013年	クラーク記念国際高校	東京成徳大学高校フットサル同好会
2014年	クラーク記念国際高校	湘南工科大学附属高校
2015年	SEIRITZ A	SAKUY0
2016年	フウガドールすみだファルコンズ	サントス サッカー ショップ
2017年	クラーク記念国際高等学校	フウガドールすみだファルコンズ
2018年	サントス サッカー ショップ	SBFCロンドリーナ U-18

大会要項

第3回U-18フットサルリーグチャンピオンズカップ

特定非営利活動法人サロン2002

主管

-1 長野県フットサル連盟

後援

-般社団法人長野県サッカー協会

加茂商事株式会社、株式会社ジャパン・スポーツ・プロモーション、

2019年1月5日(十)、1月6日(日)

ことぶきアリーナ千曲(長野県)

- 1. 一般財団法人日本フットサル連盟に加盟承認された単独チームであ
- 2. 第1項に所属する2000年4月2日以降に生まれた選手で男女を問 わない。但し、高等学校在学中の選手にはこの年齢制限を適用しな
- 3. 当該チームにおいて、2018年度のU-18フットサルリーグに出場し ている選手であること。

参加チームは、次の各号により選出された12チームとする。

- 1. 地域または都道府県のフットサル連盟が主催、主管または後援して 開催される2018年度のU-18フットサルリーグの優勝チーム。
- 出場チームが12チームに満たない場合は、以下の順で出場チーム 枠を設定し、12チームでの開催とする。
 - ① 開催地のリーグ優勝チーム
 - ② 当該年度のリーグ参加チーム数の多いリーグの準優勝チーム

- 1次ラウンド:12チームを4チームずつ3グループに分けてリーグ戦を行い、各グループ1位チーム及び2位のうち成績上位1チー ムが2次ラウンドへ進出する。順位は、勝点合計の多いチームを上 位とする。勝点は、勝ち3、引分け1、負け0とする。ただし、 勝点合計が同じ場合は、以下の順序により決定する。
 - ① 当該チーム内の対戦成績
 ② 当該チーム内の得失点差

 - ③ 当該チーム内の総得点数
 - ④ グループ内での総得失点差 ⑤ グループ内での総得点数

 - 下記に基づく警告、退場のポイント合計がより少ないチームi) イエローカード 1 枚 1ポイント ii) イエローカード2枚によるレッドカード1枚 3ポイント3ポイント iii) レッドカード1枚 iv) イエローカード1枚に続くレッドカード1枚 4ポイント ⑦ 抽選
- 1次ラウンドの各グループ2位チームのうち、2次ラウンドに進出 するチームは、以下の項目の順序で決定する。
 - ① 勝点合計
 - ② 得失点差
 - ③ 総得点数
 - ④ 抽選
- 2次ラウンド:上位4チームによるノックアウト方式で行う。(3) 位決定戦は行わない)

競技規則

大会実施年度の「フットサル競技規則」による。

競技会規定

以下の項目については、本大会で規定する。

- 1. ピッチ
- 35~40m×16~20m
- 2. ボール
 - 試合球:フットサル4号ボール
- 競技者の数 競技者の数:5名
- 交代要員の数: 9名
- チーム役員チーム役員:4名以内
- 5. 競技者の用具

 - ① ユニフォーム (ア) フィールドプレーヤー、ゴールキーパーともに、色彩が異な

- り判別しやすい正副のユニフォーム(シャツまたはジャ -、パンツ、ストッキング)を参加申込書に記載し、各試
- 合には正副ともに必ず携行すること。 (イ) チームのユニフォームのうち、シャツまたはジャージーの色 彩は審判員が通常着用する黒色と明確に判別しうるものであ
- (ウ) フィールドプレーヤーとして試合に登録された選手がゴール キーパーに代わる場合、その試合でゴールキーパーが着用するシャツまたはジャージーと同一の色彩および同一のデザイ
- ンで、かつ自分自身の背番号のついたものを着用すること。 (エ) パワープレーを行うチームのフィールドプレーヤーのジャー ジーまたはシャツは、自チームのゴールキーバーと同一の色、デザインとする。
- (オ) シャツまたはジャージーには、参加申込書に登録した選手番 号を付けること。ショーツにも選手番号を付けることが望ま しい。選手番号は服地と明確に区別し得る色彩であり、かつ 判別が容易なサイズのものでなければならない。
- (カ) 選手番号については1から99までの整数とし、0は認めない。 1番はゴールキーパーのために用意される
- (+) ユニフォームの色、選手番号の参加申込締切日以後の変更は 認めない。
- ② 靴:フットサル用シューズのみ使用可能とする。ただし、本大 会会場の利用規定により靴底の接地面が飴色、白色もしくは無 色透明以外の色はノンマーキングシューズであっても使用でき ない場合がある。
- ③ ビブス: 交代要員は、競技者と異なる色のビブスを着用しなけ ればならない。
- 6. 試合時間

1次ラウンド:24分間(前後半各12分間)のプレーイングタイム とし、ハーフタイムのインターバルは5分間(前半終了から後半開 始まで)とする。

2次ラウンド:30分間(前後半各15分間)のプレーイングタイム とし、ハーフタイムのインターバルは7分間(前半終了から後半開 始まで)とする。

- 7. 試合の勝者を決定する方法(試合時間内で勝敗が決しない場合) ① 1次ラウンド:引き分け
 - ② 2次ラウンド:PK方式により次回戦進出チームおよび優勝チー ムを決定する。PK方式に入る前のインターバルは1分間とする。

懲罰

- 1. 本大会において退場を命じられた選手は、自動的に本大会の次の1 試合に出場できない。
- 2. 本大会期間中に警告の累積が2回に及んだ選手は、自動的に本大会 の次の1試合に出場できない。
- 前項により出場停止処分を受けたとき、1次ラウンド終了時点で警 告の累積が1回のとき、または本大会の終了のとき、警告の累積は 消滅する。
- 4. その他、本大会の懲罰に関する事項については、本大会の大会規律 委員会が決定する。

- 1チームあたり26名(役員6名、選手20名)を上限とし、選手は 選出元のリーグに登録していること。
- 2. 申込み締切日以降の参加申込内容の変更は認めない。

各チームの登録選手は、日本サッカー協会発行の電子選手証の写し(写 真が登録されたもの:フットサル登録選手)、または選手証(写真が貼 付されたもの:サッカー登録選手)を、代表者会議および試合会場に持 参すること。電子選手証または選手証が確認できない場合は、試合に出 場できない。

表彰

- T.: 優勝、準優勝のチームを表彰する。

その他

- 1. チームは、ユニフォームおよび電子選手証を代表者会議に持参す る。
- 2. 参加チームと選手は日本サッカー協会の基本規程および付属する諸 規程を順守しなければならない。
- 大会規定に違反し、その他不正行為等があった場合は、そのチーム の出場を停止する。
- 試合が一方のチームの責に帰すべき事由により開催不能または中止 になった場合、その帰責事由のあるチームは0対5または、その時 点のスコアがそれ以上であればそのスコアで敗戦したものとみな
- 5. 本実施要項に記載のない事項については、大会実行委員会にて決定 する。

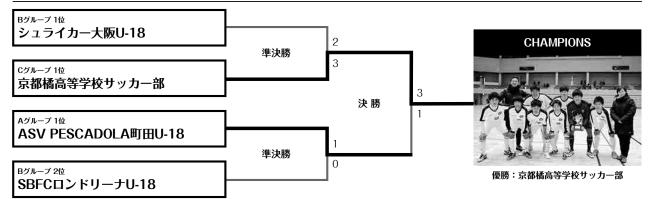
大会結果

1次ラウンド

マ 抽	~ L	ジキカロ	リーナ千曲
アン	-c	かさご) —) T IIII

_										
	Aグループ	A1	A2	А3	A4	勝点	得点	失点	得失点	順位
A1	日本ウェルネス筑北SC 長野県		3 △ 3	2 ● 4	1 ● 10	1	6	17	-11	3
A2	宝塚フットサルクラブU-18 兵庫県	3 △ 3		0 ● 9	0 ● 7	1	3	19	-16	4
АЗ	ASV PESCADOLA町田U-18 東京都	4 🔾 2	9 🔾 0		4 🔾 1	9	17	3	14	1
A4	サントスFC/santista 愛知県	10 🔾 1	7 0 0	1 • 4		6	18	5	13	2
	Bグループ	В1	B2	В3	B4	勝点	得点	失点	得失点	順位
В1	明科高等学校サッカー部 開催地		2 ● 10	2 • 22	1 ● 5	0	5	37	-32	4
B2	シュライカー大阪U-18 大阪府	10 🔾 2		1 • 2	6 0 0	6	17	4	13	1
вз	SBFCロンドリーナU-18 神奈川県	22 🔾 2	2 🔾 1		1 • 2	6	25	5	20	2
B4	エンフレンテ 熊本U-18 熊本県	5 🔾 1	0 ● 6	2 🔾 1		6	7	8	-1	3
	Cグループ	C1	C2	C3	C4	勝点	得点	失点	得失点	順位
C1	不二越工業高等学校 富山県		5 ● 8	2 ● 5	2 \(\triangle 2	1	9	15	-6	4
C2	京都橘高等学校サッカー部 京都府	8 🔾 5		5 🔾 1	5 🔾 3	9	18	9	9	1
СЗ	ディヴェルティード旭川エルマーノス 北海道	5 🔾 2	1 ● 5		1 ● 4	3	7	11	-4	3
C4	CRAQUES 静岡県	2 △ 2	3 ● 5	4 🔾 1		4	9	8	1	2

2次ラウンド 会場:ことぶきアリーナ千曲



得点ランキング

順位	選手名	所属	得点	順位	選手名	所属	得点	順位	選手名	所属	得点
1	薮内 涼馬	SBFCロンドリーナU-18	12	2	山口 勝輝	サントスFC/santista	7	8	板橋 琉聖	ASV PESCADOLA 町田U-18	4
				2	金沢 一矢	京都橘高等学校サッカー部	7	8	甲斐 稜人	ASV PESCADOLA 町田U-18	4
				4	井口 凜太郎	シュライカー大阪U-18	6	13	ペレイラ チアゴ ヒデキ ミヤザキ	サントスFC/santista	3
				5	垣谷 将太郎	京都橘高等学校サッカー部	5	13	温立丞	SBFCロンドリーナU-18	3
4		25		5	林 倖二郎	京都橘高等学校サッカー部	5	13	温 立立	20LCU/L/-/0-10	3
4	/			5	稲本 結斗	サントスFC/santista	5	13	渡辺 旺介	SBFCロンドリーナU-18	3
	-			_				13	甲林 陸	シュライカー大阪U-18	3
A.	100		4	8	川戸 渉平	京都橘高等学校サッカー部	4	10	다 2년 n.L ##	S. = Z. +	
		× //		8	原田 蓮人	SBFCロンドリーナU-18	4	13	岩渕 叶夢	シュライカー大阪U-18	3
		5 4		0	T# >	ODAOUEO	4	13	藤本 毅	エンフレンテ熊本	3
-				8	千葉 一心	QRAQUES	4	13	石川 駿	明科高等学校サッカー部	3
	得点王	:薮内 涼馬 選手						. •		731 111 7 3 3 1X 7 7 7 3 HP	

SPORT FOR TOMORROW 事業への参加

SPORT FOR TOMORROW (以下、SFT) は、 2020年オリンピック・パラリンピック競技大会 を東京に招致する際、IOC総会において安部晋三 首相が発表したことをきっかけに始まった日本政府 が推進する国際協力・交流事業です。2014年から 2020年までの7年間で、開発途上国をはじめとす る 100 カ国以上・1000 万人以上を対象としたあ



らゆる世代の人々にスポーツの価値を広げることを 目指しています。サロン 2002 は、SFT のムーブ メントを推進する官民連携のネットワーク「スポー ツ・フォー・トゥモロー・コンソーシアム」に会員 団体として加盟しています。そして、国籍や年齢・ 性別などが異なる人でも一緒に楽しくボールを蹴る ことを目的にした「Non-Border Football」の 実施や、外務省が主導するソマリア難民キャンプへ のサッカー用具寄贈への協力、月例会での海外指導 者との意見交換会開催などへの協力などを通して、 スポーツを通した国際協力・国際交流を行ってきま した。2018年度は、12月に実施された「SFTC 会員交流会」にてサロン2002の活動を広く紹介 した他、2月には「Non-Border ボッチャ交流会」 を開催し、海外の方ともスポーツを通して交流する 機会を創出しました。「Non-Border ボッチャ交 流会」の詳細については、後続の報告をご覧くださ い。

SPORT FOR TOMORROW 公式ホームページ: http://www.sport4tomorrow.jp/jp/

「SFTC 会員交流会」ではサロン 2002 デスクを 設置し、ネットワークがさらに広がりました。



3 クーベルタン) - 嘉納ユースフォーラム2018

【目的】

- 1. オリンピック教育:日本の高校生にオリンピック・ムーブメントやオリンピズムを理解させる
- 2. 選考:第12回国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムへの参加者を選考する
- 注) 2019 年 8 月 24 日~ 31 日、フランス・マコン市で開催。日本から高校生 7 名と引率教員 1 名が参 加。参加生徒は筑波大と中京大で開かれるユースフォーラムにて選考する。
- 【主催】 筑波大学オリンピック教育プラットフォーム (CORE)
- 【共 催】 特定非営利活動法人サロン 2002 (NPO 法人サロン 2002)
- 【協力】 特定非営利活動法人日本オリンピック・アカデミー(NPO法人 JOA)
- 【期 日】 2018年12月23日(日) ~ 25日(火)
- 【会 場】 筑波大学 (茨城県つくば市天王台 1-1-1 体育・芸術専門学群棟、野性の森、ダンス場等)

宿泊先: 筑波研修センター (茨城県つくば市天久保 1-13-5)

【参加校】 高校生 男子6名、女子18名、計24名

・筑波大学附属高校 … 男4名、女7名、計11名

・筑波大学附属坂戸高校 … 男1名、女2名、計3名

… 男1名、女9名、計10名 ・自由学園

【引率教諭】

所属:	·立場	氏名	ふりがな	所属/教科·専門分野
筑波大附 西 祐貴子 にし ゆきこ 家庭和		家庭科		
附属	坂戸	藤原 亮治	ふじわら りょうじ	保健体育(陸上)
自由学園	男子部	内田裕之	うちだ ひろゆき	保健体育(サッカー)
日田子園	女子部	山田恵子	やまだ けいこ	保健体育(体操)

【スタッフ】

所属·担当	氏名	ふりがな	所属/教科·専門分野
コーディネーター	中塚義実	なかつか よしみ	筑波大学附属高校教諭/CORE運営委員 /NPOサロン2002理事長
	真田 久	さなだ ひさし	筑波大学体育系教授
	宮﨑明世	みやざき あきよ	筑波大学体育系准教授
	大林太朗	おおばやし たろう	筑波大学助教
筑波大学CORE	江上いずみ	えがみ いずみ	筑波大学客員教授
	鈴木王香	すずき おうか	筑波大学体育系研究員
	福田佳太	ふくだ けいた	筑波大学体育系非常勤研究員
	外山美祐希	とやま みゆき	筑波大学大学院生
	嶋崎雅規	しまざき まさき	国際武道大学/NPOサロン2002理事
NPO法人サロン2002	小池 靖	こいけ やすし	スポネットサロン2002メンバー
	皆川宥子	みながわ ゆうこ	東京大学大学院/2013国際YF参加者
CJPC	田原淳子	たはらじゅんこ	国士舘大学/CIPC副会長
高体連視察	庄司一也	しょうじかずや	全国高体連研究部部長

【プログラムとスケジュール詳細】

< 12月23日(日祝) >

- ◆12:00~12:30 受付 (5C507)
- ※受付時に参加費(一人 12,000円) 徴収。個人写真撮影(野外活動中に写真入り名簿完成)
- ◆ 12:30 ~ 13:45 ガイダンスおよび参加校紹介(5C507)
 - 1) あいさつ (宮崎明世/ CORE 運営委員)
 - 2) ガイダンス (中塚義実/CORE 運営委員・NPO 法人サロン 2002 理事長・コーディネーター)
 - ・本フォーラムの位置づけと全体日程
 - ・国際ピエール・ド・クーベルタン YF とは
 - ・筆記試験の課題と評価の観点 「あなたは学校でどのようにオリンピズムを推進したいと思いますか。具体的に述べてください」
 - 3) 参加校(3校)紹介

各校 10 分で、事前に用意してきたスライドを用いて紹介した(10 分では収まり切らなかった)。

- → 更衣の後、「野性の森」へ移動
- ◆ 14:15 ~ 19:00 野外活動・飯盒炊爨 (野性の森)
 - ・筑波大学野外運動研究室の坂谷充氏(筑波大学体育系特任助教)ほか5名のスタッフで進行。
 - 1) 体ほぐし&グルーピング
 - ・全体で簡易ゲームで体と心をほぐす(2人組の体ほぐし運動、ジャンケンゲームなど)
 - ・男女混合、学校混合で3班に分かれ、それぞれに野外研究室の院生・学生がつく
 - 2) グループごとに A.S.E. (Action Socialization Experience)円陣ボール投げ(名前を呼ぶ) /丸太の上を全員で移動/全員で手つなぎ→ほどく/綱渡り/壁乗り越え/ターザン/ ← これらをグループごとに 4~5種目
- 3) 野外パーティ
 - ・グループごとに異なる料理を作る
 - 19:00 「野性の森」を出発。徒歩で研修センターへ 19:15 研修センター着 入浴・自由時間
 - 19:30~20:00 教師 MTG
 - 22:30 門限
 - 23:00 消灯
 - ※小雨が降るあいにくの天気だったが、大降りになることもなく、またスタッフの準備も万全で、予定どおり 進めることができた。野外活動ではスタッフの方々の働きかけが素晴らしく、参加生徒は一気に打ち解ける 初日のプログラムであった。
 - ※個室なので、門限まではロビーや友だちの部屋で過ごすが、23 時には男子も女子も静かになった(疲れ切っていたのかもしれない)。

< 12月24日(月) >

- ◆6:30 起床・ラジオ体操
 - ・NHK ラジオでラジオ体操第一と第二。「できる人」が前に立つ(「やったことがない」生徒もいた!) ※この時刻にラジオ体操を開始できるよう、各自で起床時刻を設定。遅刻者はいなかった。
- ◆7:00 朝食
 - ・各自トレーを取って席について食事。全体での食前食後のあいさつはなし(他の宿泊者もいる)
 - 8:00 出発(徒歩約20分)

◆講義(5C507)

- 1)8:40~9:30 オリンピックの歴史とピエール・ド・クーベルタン(田原淳子)
- 2) 9:40~10:20 嘉納治五郎
 - -オリンピックと長距離走(真田 久)
- 3) 10:30 ~ 11:30 国際人としてのおもてなしの心ーグローバルに活躍するために(江上いずみ)
 - ※ 50 分刻みの講義は、高校の授業と同じなので、生徒たちは集中を切らすことなく各講義に臨んでいた。 質問も積極的に出ていた。

※講義後、全員で大学会館へ移動。

記念写真とギャラリー見学



11:30~13:00 昼食・休憩

- ◆13:00~15:00 演習① OVEP 教材を用いたグループ活動(宮崎明世) 「オリンピック・シンボルを考えよう」
 - 1) オリンピック・シンボルを書いてみよう
 - 2) オリンピック・シンボルが作られた時代について
 - 3) 新しいオリンピック・シンボルを作ってみよう【グループ活動】 ※限られた時間の中で発表まで持って行くにはタイムマネジメントが重要。5 班に分かれてのグループ活動 は、班ごとの個性があふれ、おもしろかった。
- ◆ 15:00 ~ 17:00 実技:体操・Gボール (鈴木王香) 於総合体育館。終了後研修センターへ移動
 - 1)ペアでチャレンジ!
 - 2 人組で体ほぐしのあと 4 ヵ所を回りながら次の運動にチャレンジ。LEVEL1 \sim 3or4 まであり。 ①バケツキャッチ、②クッションだるま落とし、③コンビ de 縄跳び、④ギザギザ Ball キャッチ
 - 2) ペアで G ボール
 - 3) グループで G ボール
 - ※今回のスポーツ活動は「競争」よりも「協働」。笑いの絶えない活動となった。2 人組の体ほぐしからペアでさまざまな運動にチャレンジ! できそうでできない、けど挑戦するうちにできてしまう、絶妙な課題だった。G ボールも、ペアで取り組むものから4 人組、最後は8 人組の大所帯で取り組むものまで、とにかく楽しめた。教員チームも知らぬ間に加わっていた。
- ◆ 18:30 夕食
- ◆ 19:20 ~ 21:30 演習② オリンピック・パラリンピックについての英語による討議

- 1) ガイダンス(嶋崎)
 - ・性別・学校が分かれるよう4班に編成した。
 - ・テーマは「2020年に何を遺すか」。1964のレガシーと 2020の状況についての講義あり
 - ・和室に入ったら日本語を使用してはならない。21 時になったら日本語解禁。翌日の発表に備える翌日は、各班7分間でポスターを用いて発表する。質疑の時間を取る
 - ・補足:討議を進めるうえでのヒント(皆川) 各自が考えたことを付箋に書いて貼っていくとよい。「黙っている」のがダメ。
- 2) グループ討議
 - ・3Fの和室に分かれて討議。テーマは「2020年に何を遺すか-わたしたちには何ができるか」 ※多くの生徒が心配していた英語での討議。英語に堪能な生徒がリードしていく様子はいつも通りだが、今回は誰もが積極的に関わろうとする姿勢が見られてよかった。日本語解禁となったとき、「日本語で伝えあうことができるありがたさ」を皆が感じていたようだ。
 - ・21:30には部屋を出て、ロビー等で続きの作業。終わったグループから解散。23:30門限
- ◆ 21:10 ~ 21:40 教師 MTG
- ◆ 23:00 消灯

※グループ討議を終えて和室を出てからも、翌日の発表準備をしているところが多かった。各自の部屋へ戻ってからは、疲れ切ったのか、静かに寝ていたようだ。

< 12月25日(月)>

- ◆6:30 起床・ラジオ体操
- ◆7:00 朝食
- ◆9:00~10:10 演習②の報告
 - ・進行は嶋崎氏。各班7分程度のプレゼンテーション。その後、質疑。
 - ※いずれも力作ぞろい。英語での討論とその後の日本語でのまとめ。それを模造紙に書き出す作業は大変だったろうが、いずれもよくできていた。高校生の可能性を感じさせる内容だった。
- ◆10:10~11:10 筆記テスト

第 12 回 国 際 YF(2019 年 8 月 24-31 日 , 於 マ コ ン) の 標 語 Olympism at school. It must be encouraged! を受けて、「あなたは学校でどのようにオリンピズムを推進したいと思いますか。具体的に述べてください。」

参考資料は持ちこんでよい。スマホを用いて調べるのも可。時間は 60 分。書き終えたら退室可。 ※初日に課題を伝えてあったからか、みなたっぷり書いていた。

- ◆11:30~12:10 クロージング
- 1)全体の振り返りと今後の見通し(中塚)
- 2) 引率者・スタッフからのコメント
- 3) 修了証の授与(真田氏)
- 4)参加者からのコメント
- 5) アンケート提出・解散

※コーディネーターからは、①あきらめない、②一人でやらない&人に依存しない、③ソーゾーリョク(想像、創造)を働かせることの重要性を語り、最後に「忘れない」ことを求めた。たった 2 泊 3 日であったがとても有意義なフォーラムであった。

文責:中塚義実

第1回Non-Borderボッチャ交流会

2019年2月11日、桐陰会館にて「第1回 Non-Borderボッチャ交流会」を開催し、約130名が参加しました。ボッチャはヨーロッパで生まれたパラリンピックの正式種目です。パラスポーツかつ共生型スポーツであり、近年は多くの団体や企業でも交流プログラムとして導入されています。本交流会はスポーツを通して年齢・性別・国籍・スポーツ経験などを超えて交流し、"ゆたかなくらしづくり"を目指す企画の1つとして開催しました。

まず初心者などを対象としたボッチャ体験会から始まり、開会式では青年海外協力隊として活動中の浅見明子氏の協力のもとネパールのバクタプルという町の特別支援学校と中継をつなぎ、ネパール語でのカウントダウン「エク、ドゥイ、ティン」の掛け声に合わせて始球式を行いました。国境を越えて二地域が一体となり、Non-Borderを肌で感じた瞬間でした。



ネパールでのボッチャ交流会の様子

続いて第一部の開幕です。参加申込単位で3~6名のチームを組み、6リーグに分かれ総当たりをし、その後の順位決定戦を経て、優勝3チームを決定しました。日頃から練習に励んでいるチームもあれば、今回が初めて・探り探り感触を確かめながら挑んでいるチームもありましたが、終始笑顔や歓声の絶えない、非常に和やかなひとときだったと思います。

また今回の交流会では、ボッチャイベントのほか 主に3つの企画を行いました。1つめは団体紹介デスクの設置です。事前に募った7つの団体のデスクを会場内に設置し、活動紹介・チャリティー販売



参加者から寄せられたメッセージ (i-PLAY TRUE トーチリレー)

などを行いました。2つめはボッチャバーの設置です。収益の一部を上記の出展団体の活動への寄付とし、希望者にはドリンク購入時に寄付先を選んでいただきました。3つめには「i-PLAY TRUE トーチリレー」の実施。これは日本アンチ・ドーピング機構(JADA)が展開するプロジェクトで、参加者から集まった「2020年以降に残したいスポーツのいいところ」や「交流会で感じたスポーツの価値」などのメッセージは、東京2020大会期間中にさまざまな形でお披露目予定です。その他、会場校である筑波大学附属中学校・高等学校の卒業生や学校の歴史を紹介する資料室を開放。大河ドラマ「いだてん」で話題の金栗四三氏・嘉納治五郎氏などの功績も展示されており、各々試合の合間に楽しんでいました。

そして第二部では当日くじ引きで決定した混合 チームによるノックアウト戦を行いました。第一部 で見られた盛り上がりのまま、すぐにチームが溶け 込んでゆく様子が印象的でした。固唾を飲んで見守 るシーンやハイファイブで喜ぶシーン…数々の名場 面が生まれたことでしょう。最後には会場全体が 1 つのコートに注目する中、白熱した決勝戦が行われました。個人の技量もさることながら、即席グループとは思えないチームワークを持つ両チーム。とても見応えのある試合でした。

閉会式では表彰のほか、ナイジェリア政府の草の根 スポーツ開発局長や会場校代表の高校生、優勝チーム のスピーチ等が行われ、優しい雰囲気の中、交流会は 幕を閉じました。



祈る姿勢は三者三様、しかし想いは一つ。

日常生活における交友関係は何となく決まってしま い、限られた輪の中での交流を深めることが多いのが 現状です。そんな中、今回の交流会は、まさにある共 通の興味を持った人々が一堂に会し、スポーツを通じ て Non-border を体感する場となりました。ゆた かなくらしづくりの1つのカタチとして、このような きっかけづくりに大きな可能性を感じた一日でした。



第2部 優勝チームの皆さん



新たな交流の数々

<参加者からのコメント>

参加者の皆さんから多くのメッセージをいただきま したので、その一部をご紹介させていただきます。

「性別国籍体格関係なしにできるボッチャ会場には 色んな方がいて盛り上がりの中にも優しい空気を感じ ました。」「もっともっとボッチャの輪が世界に広まり ますように…」「あれだけ『えーめんどくさいー』と 言っていた中1と小5の子どもを連れ出したこと自 体が奇跡だったのですが、帰るときに『また参加した い』と言うのを聞いて、連れてきて良かったなあと思 いました。」「Non-Border ボッチャ交流会で、ボッ チャデビュー。想像以上に楽しくて、本当に本当に年 齢・性別・障害・言語などの壁を感じることなく、 楽しめました。」…等々。また、第一部優勝チームで 職場の皆さんで参加された、チーム総スポさんからは 「ボッチャは幅広く対等にでき、オフィス内の会話も 盛り上げられる。全国に広げていきたい。」という声 をいただきました。

なお、運営にあたりましては豊島区スポーツ推進委 員の皆様をはじめ、賞品を提供いただいた株式会社セ ノー様など多くの方々にご協力いただきました。この 場を借りて御礼申し上げます。第2回も乞うご期待く ださい。



自分の真なる想いを映す「フィルターポーズ」での集合写真

5 リサイクルプロジェクト / スキンプロジェクト

サロン 2002 では、履き潰されたサッカーシュー ズや使えなくなったサッカーボールの「革」を活 用して、コインケースやキーケース、サンダルな どを制作する「リサイクルプロジェクト/スキン プロジェクト」を実施しています。この活動は、 サロン 2002 が事務局業務を受託しているユース サッカーリーグ「DUO リーグ」で、「巨大靴型ト ロフィー」を製作したことに端を発します。DUO リーグでは優勝チームでトロフィーを持ち回してい ましたが、2008年にトロフィーを紛失するとい う出来事が発生しました。その際に、「「遊び心」を 持った DUO リーグらしいトロフィーを製作しよ う!」、「リーグに出場するサッカークラブ(主に高 校サッカー部) の資源を活用しよう! | という発想 から、リーグに出場する選手より履き潰された靴を 回収し、現代アーティスト「KOSUGE1-16」と 靴創家「靴郎堂本店」の協力を得て製作したものが 「履けなくなった靴でできた、履けるトロフィー」 です。現在では、トロフィーには優勝チームのロ

ゴが刻まれ、MVPや得点王の選手にはシューズの「革」から製作した靴型キーホルダー(「巨大靴型トロフィー」のミニチュア版)が送られています。また、トロフィーを製作したことをきっかけに、サッカーシューズやサッカーボールの「革」から新たな商品を製作するワークショップを各地で実施するようになりました。

2018 年度も DUO リーグ前期・後期優勝チームには「巨大靴型トロフィー」が贈呈されました。



「DUOリーグ」事務局業務受託

サロン 2002 では、2016年2月より DUO リー グの事務局および企画部業務を受託しています。 DUO リーグは、東京都文京区・豊島区・足立区・ 中央区の高校運動部を中心としたサッカーリーグ で、全国に広がるユースサッカーリーグのモデルと なったリーグです。レベルやニーズに応じて、「歯 磨き感覚」「引退なし」「補欠ゼロ」でサッカーが楽 しめる環境づくりを目指しています。 サロン 2002 理事長の中塚義実が初代チェアマンを務め、DUO リーグの理念や構想にはサロン2002の月例会で の議論が大きく影響しています。現在は、地区トッ プリーグへの昇格をかけた前期リーグ戦とピッチの サイズや出場選手数に柔軟性を持たせた後期リーグ 戦(フリーサイズフットボールおよびフレキシブル リーグ) が行われています。

2018年度は、DUO リーグのホームページを リニューアルした他、企画部として2018年7月 16日に東京リゾート&スポーツ専門学校に協力い ただき DUO リーグ関係者 (プレーヤー・マネー ジャー・指導者等)を対象とした「テーピング&リ ハビリ&アジリティトレーニング講習会」を開催し ました。









